

土する。「永楽通寶」である。

所見：錢貨から中世以降の所産と考える。

10区432号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区K-13・14グリッド

規模：長軸長約1.2×短軸長0.8mの楕円状の平面形を呈す。主軸方位を北北東に向ける。

重複：ピット状の464号土坑が東壁に重なる。新旧は不明である。420号土坑は西北西3.6mと近い距離にある。

人骨：底面にやや浮いた状態で、四肢骨の一部が出土している。遺存度は悪い。

遺物：壁際より錢貨2枚を出土する。遺存度が悪いが宋錢と思われる。

所見：錢貨から中世以降の所産と考える。

10区485号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区J-14・15グリッド

規模：長軸長約1.4×短軸長約1.1mを測る小型の長方形を平面形とする。深さは約40cmである。

重複：重複遺構は無い。538号土坑や539号土坑などピット状の土坑が群在する。

人骨：底面に僅かに骨片の出土を見るが非常に遺存状態も悪い。

遺物：伴出遺物は無い。

所見：上層に大型礫を集めた土坑である。骨の出土を見ているため、墓壙として位置付けたが、他の墓壙と較べてやや確定性に乏しい。

10区 541号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区H・I-14グリッド

規模：10区調査区北東で調査された。長軸長約1.0×短軸長0.6m、深さ約12cmを測る小型の土坑である。平面形は不整楕円状を呈し、断面形は浅い皿状である。主軸方位は北北東に向く。

重複：重複する主な遺構は無い。544号土坑が西に近接するが、周辺遺構は少ない。先に挙げた墓壙ともやや距離を置く。

人骨：底面より僅かに浮いた状態で、歯と骨片が出土する。骨片の遺存度は悪い。

遺物：伴出遺物はなかった。

所見：小型の墓壙である。伴出遺物も無いため時期は不確定である。中世～近世か。

10 土坑 (第113～122図/PL17～20)

ここでは、9～11区の古代～中・近世に比定された土坑を述べる。10区土坑に関しては、600基以上の土坑番号が付されていた。多くが小ピット状で浅く、有機的な所産とするには問題があると考え、さらに紙数の制限も踏まえて、良好な土坑を優先して掲載した。小ピット状の土坑に関しては、巻末に表組として位置・規模を一覧している。前にも述べたように、遺物を出土しない土坑に関しては、土層や土坑形態などから時期を判断している。そのため、本項で挙げた土坑の中には縄文時代や弥生時代の土坑が含まれてしまった恐れもある。ご容赦願いたい。また、墓壙に関しても前項ではなく、本項で扱った。第4章 分析 第1節 横壁中村遺跡出土人骨において取り扱った144号土坑と147号土坑は墓壙の坑で扱わず、本項で述べている。ご注意願いたい。

9区1号土坑

調査年度：平成15年度

位置：9・19区X-25・1グリッド

規模：径約55.0cm、深さ約8センチの小型の円形土坑である。遺存度は不良である。

重複：重複遺構は無いが、南に2号土坑が近接する。

遺物：小破片状態の鉄滓、羽口の出土を見る。

所見：小鍛冶関連遺構と思われる。時期は確定できないが、古代の可能性はある。

9区2号土坑

調査年度：平成15年度

位置：9区X-25グリッド

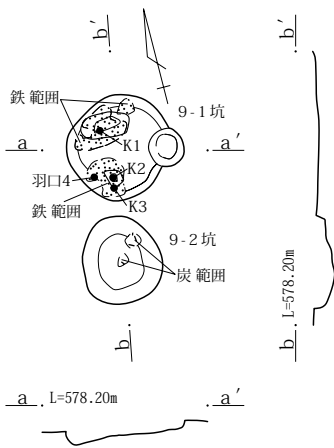
規模：径約47.0×42.0cm、深さ約11.0cmを測る小型の浅い不整円形土坑である。

重複：重複遺構は無い。1号土坑が北に近接する。

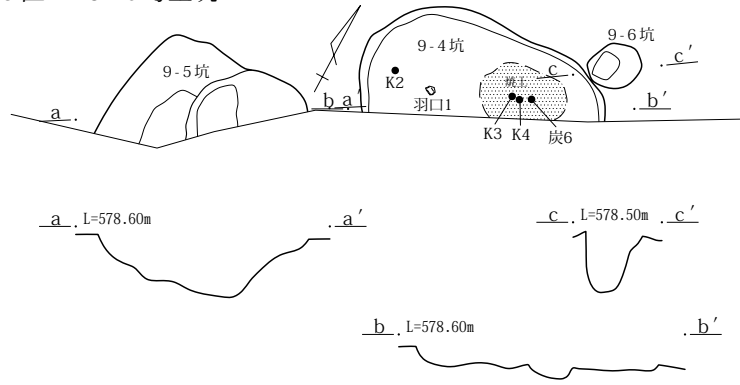
遺物：出土遺物は無いが、炭化物の散布が見られた。

所見：時期の確定はできない。1号土坑との関連から

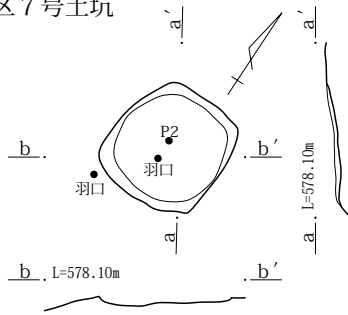
9区1・2号土坑



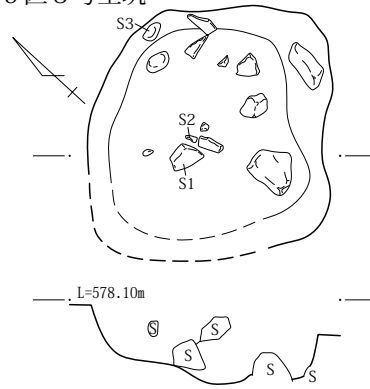
9区4・5・6号土坑



9区7号土坑



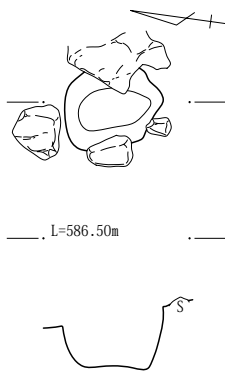
9区8号土坑



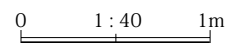
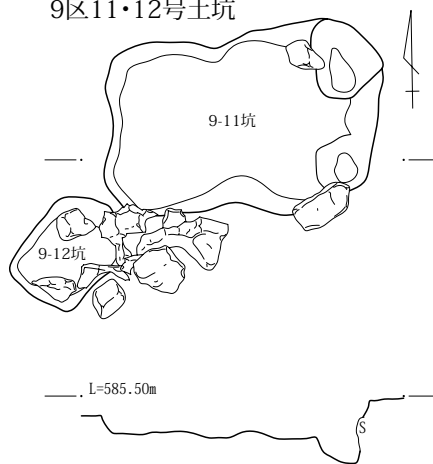
9区9号土坑



9区10号土坑

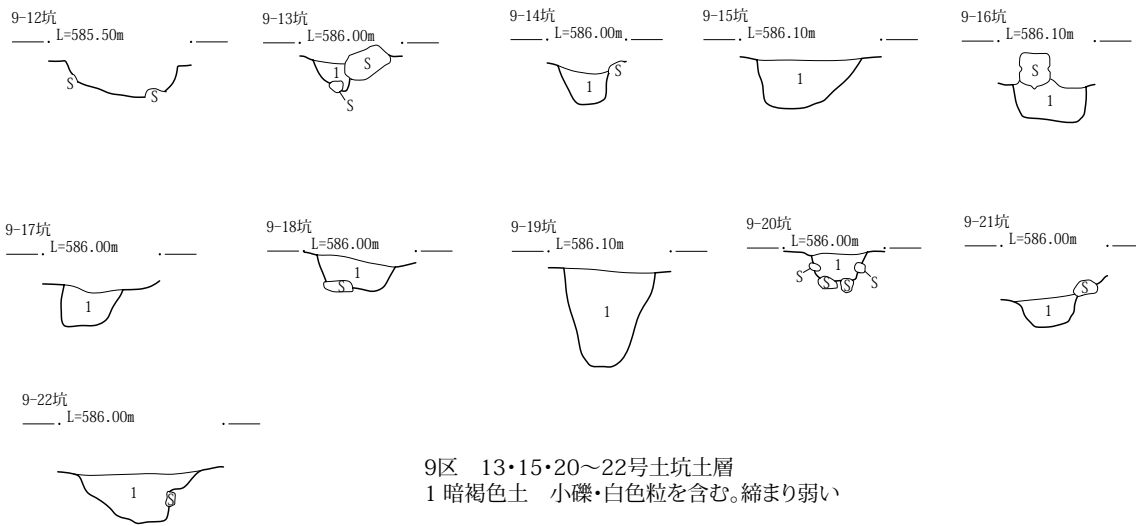
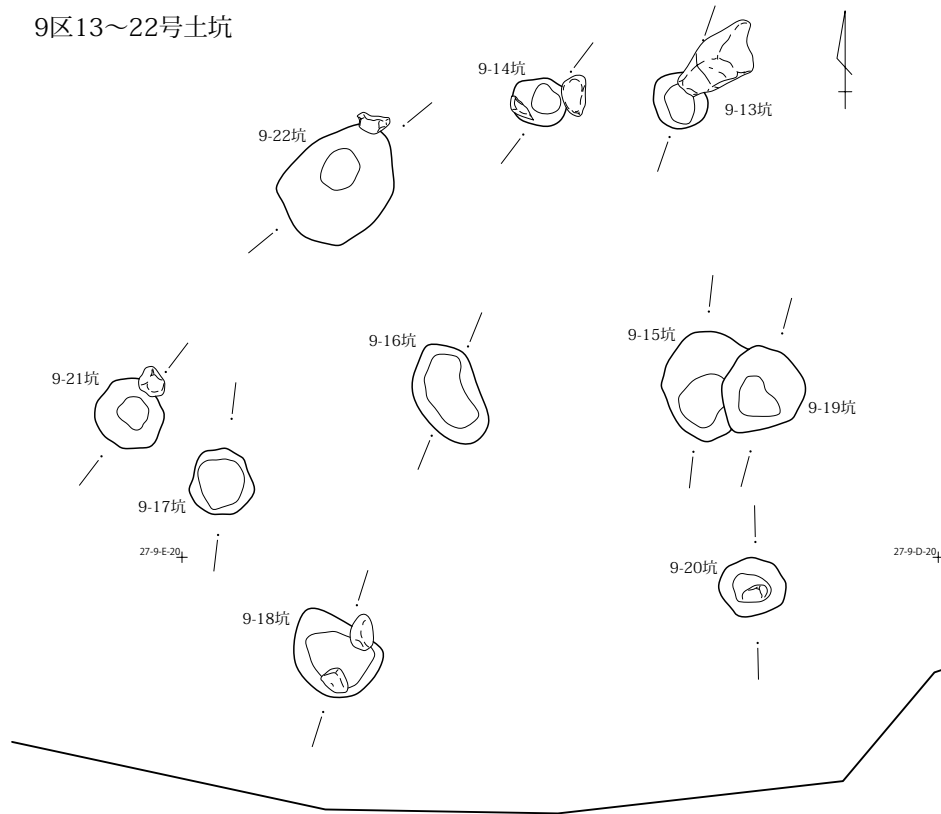


9区11・12号土坑



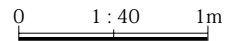
第113図 9区土坑 (古代・中世・近世) (1)

9区13~22号土坑



9区 13・15・20~22号土坑土層
1 暗褐色土 小礫・白色粒を含む。縮まり弱い

9区 14・16~19号土坑土層
1 黒褐色土 小礫・炭化物を少量含む。縮まり弱い



第114図 9区土坑 (古代・中世・近世) (2)

古代か。

9区4～6号土坑

調査年度：平成15年度

位置：9・19区X・Y-25・1グリッド

規模：4号土坑 約129.0×—、深さ10.5cm

5号土坑 約109.5×—、深さ33.0cm

6号土坑 径約24.0、深さ33.0cm

重複：重複遺構は無いが3基の土坑が近接する。

遺物：4号土坑より羽口破片が出土している。

所見：時期は確定できない。4号土坑が古代か。

9区7号土坑

調査年度：平成16年度

位置：9区X-25グリッド

規模：径約75.0×69.0、深さ約7.0cmを測る浅い不整形円形を呈する土坑である。

重複：単独の検出である。1号土坑・4号土坑などが近接する。

遺物：羽口破片が散乱した状態で底面や土坑外から出土している。

所見：小鍛冶関連遺構と思われる。時期は確定できないが、古代の可能性はある。

9区8号土坑

調査年度：平成16年度

位置：9区X-25グリッド

規模：約130×124cmの不整形を平面形とし、深さは42cmを測る。

重複：重複遺構はない。1号土坑や7号土坑が近接する。

遺物：大型礫が上面から底面にかけて出土する。

所見：時期は確定できない。

9区9号土坑

調査年度：平成17年度

位置：9区0-13グリッド

規模：径約40cm、深さ約35cmを測る、ピット状の不整形円形土坑である。

重複：9区1号石垣西で単独で調査された。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：時期は確定できない。中世～近世の所産か。

9区10号土坑

調査年度：平成17年度

位置：9区0-13グリッド

規模：径約50cm、深さ33cmを測る、ピット状の不整形円形土坑である。

重複：9区1号石垣西でやや距離を置いて、単独で調査された。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：時期は確定できない。

9区11号土坑

調査年度：平成17年度

位置：9区0・R-12・13グリッド

規模：長軸長147×短軸長101cmを測る不整形を平面形とし、深さは約30cmである。

重複：12号土坑と重複する。4号住南西隅に接する。

遺物：出土遺物はない。

所見：時期・性格とも確定できない。中世～近世の所産か。

9区12号土坑

調査年度：平成17年度

位置：9区R-12グリッド

規模：約60×45×20cmを測る不整形を平面形とする。

重複：11号土坑と重複する。新旧は不明である。

遺物：出土遺物はない。

所見：時期は確定できない。中世～近世の所産か。

9区13～22号土坑

調査年度：平成17年度

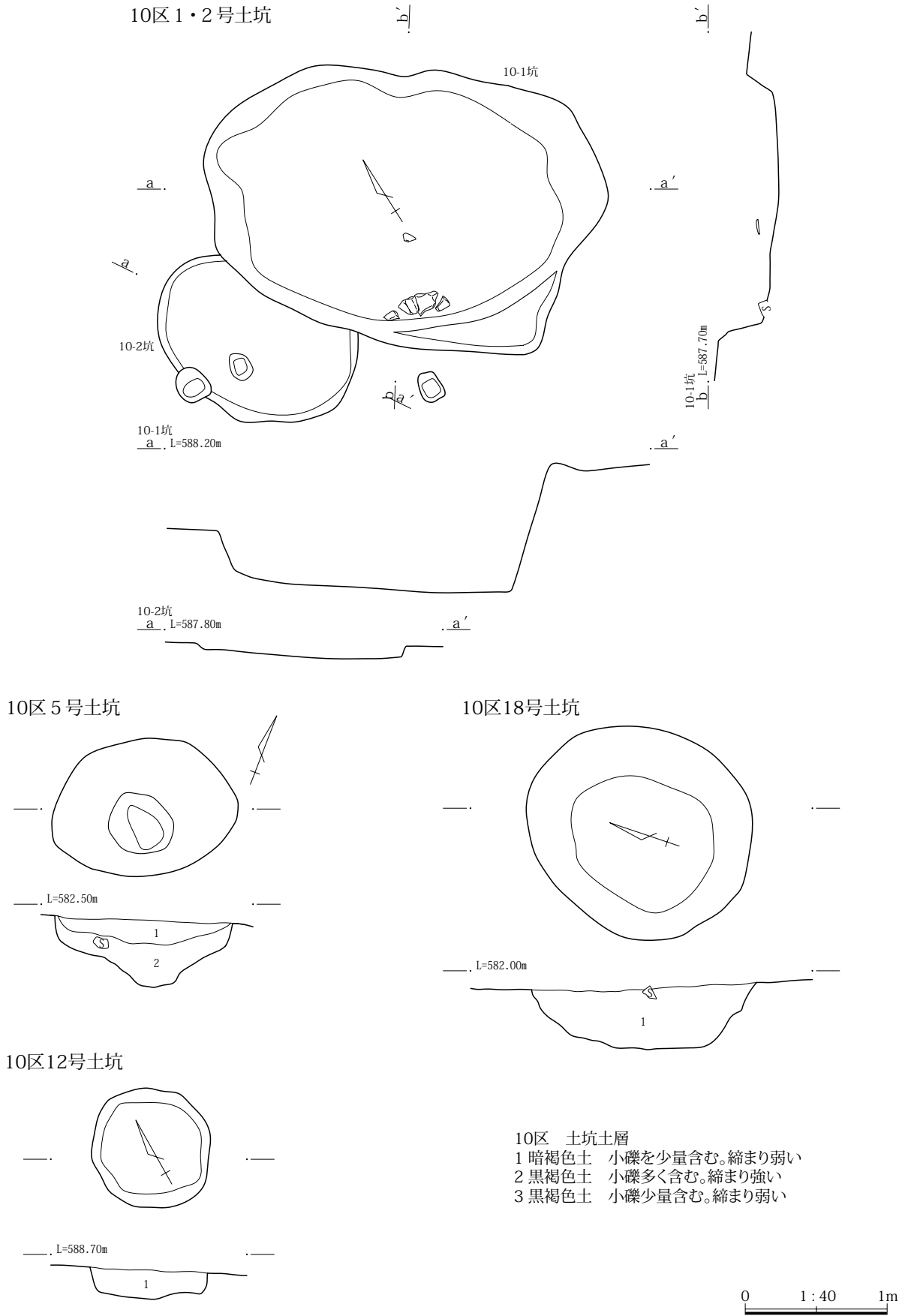
位置：9区D・E-19・20グリッド

規模：ピット状の土坑が群在する。

重複：単独の検出が多く、15号土坑と9号土坑が重複するのみである。新旧は不明である。

遺物：出土遺物はない。

所見：時期は確定できない。中世～近世の所産か。



第115図 10区土坑 (古代・中世・近世) (1)

10区1・2号土坑

調査年度：平成12年度

位置：10区L-10グリッド

規模：1号土坑は約280×186cmを測る不整長方形、深さは39cm。2号土坑は長軸長約150cmの楕円状を呈す。深さは約12cmと浅い。

重複：両土坑が重複するが、新旧は不明である。

遺物：1号土坑より、坏小片、石鉢破片が出土している。2号土坑からは、出土遺物を見ない。

所見：1号土坑は中世の所産と考える。性格は不明である。

10区5号土坑

調査年度：平成12年度

位置：10区H-23グリッド

規模：133×98cmを測る不整楕円状を呈し、深さは49cmを測る。

重複：単独の検出である。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：時期は確定できない。周辺に中世遺構が集中するため、その可能性は高い。

10区12号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区T-20グリッド

規模：径約82cm、深さ22cmを測り、平面形は円形を呈する。小型の土坑。

重複：風倒木痕と重なるが、本土坑が新しい。

遺物：出土遺物は無い。

所見：時期は確定できない。あるいは縄文時代の可能性もある。

10区18号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区V-20グリッド

規模：径約160×140cm、深さ約50cmの不整円形を平面形とする。

重複：重複遺構は無い。17号土坑が東に近接する。

遺物：出土遺物は見られない。

所見：時期は確定できない。あるいは縄文時代の可能

性もある。

10区26・27号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区M-6・7グリッド

規模：26号土坑：約185×170cm、深さ約80cm。不整円形を呈し、断面形はしっかりした箱形。坑底面は南西が凹む。27号土坑：約168×126cm、深さ約40cm。不整円形を呈し、浅い箱形の断面形。坑底面は平坦。

重複：相互の重複関係だが、新旧は不明。

遺物：26号土坑埋土下位からは大型礫が集中する。意図的な配列も想起されよう。

所見：26号土坑底面近くに焼土を見るが、性格は不明である。焼土坑の可能性もあるが人骨の出土は見ない。時期は不確定だが古代～中世に相当する様相である。

10区143号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区N-11グリッド

規模：平面形は不整楕円状で約106×85cmを測る。深さも14cmと浅い。

重複：重複遺構は無い。328号土坑が南東に近接する。

遺物：出土遺物はなかった。

所見：周辺は比較的規模のある土坑が群在する。遺物の出土が無いため、時期は確定できないが、中世～近世と考える。

10区144号土坑

調査年度：平成17年度

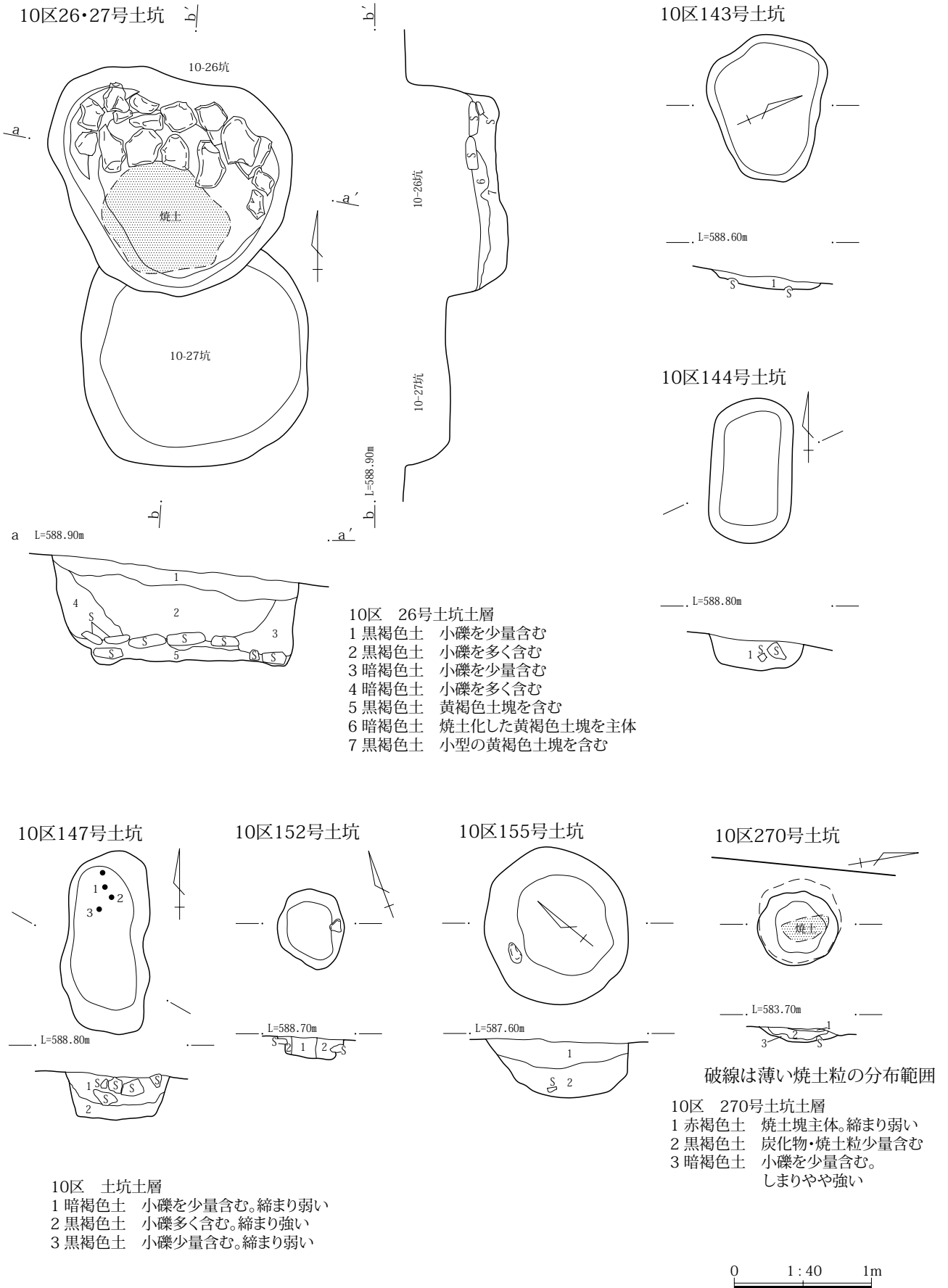
位置：10区N-11グリッド

規模：長軸長106×短軸長60cmの小型の方形土坑である。深さは約30cmを測り、掘り込みはしっかりしていた。

重複：重複遺構は無い。後述する147号土坑は南東1.6mに近接する。

遺物：土坑底面北側でやや浮いた状態で、人骨歯が出土している。

所見：本来ならば前項で取り上げるべき墓壙である。主軸方位を北に向けており、147号土坑と一致する。時期はおそらく中世以降と考える。



第116図 10区土坑 (古代・中世・近世) (2)

10区147号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区N-10・11グリッド

規模：長軸長約135×短軸長約65cmの小型の不整長方形を平面形とする。深さは約35cmを測り、しっかりした箱形の断面形を示す。

重複：重複遺構は無いが287号土坑・289号土坑が近接する。いずれもピット状土坑である。

遺物：底面より浮いた状態で、土坑北側から人骨歯片の出土を見る。他に銭貨3枚が伴出する。

所見：この土坑も墓壙である。銭貨3枚（永楽通寶・皇宋通寶・判読不能）の伴出から、中世以降に時期を求めたい。

10区152号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区V-21グリッド

規模：径約50cmの不整円形を呈する小型の土坑である。深さは16cmと浅い。

重複：重複遺構は無い。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：10区北西部の11区との境で調査された。時期は不確定だが、周辺土坑の様相からあるいは縄文時代の可能性もある。

10区155号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区S・T-22グリッド

規模：径約110×100cmの円形を平面形とする。深さは43cmを測る。

重複：重複遺構は無い。

遺物：出土遺物も見られなかった。

所見：152号土坑と同様に10区と11区の境で調査されている。時期は不確定だが、周辺土坑の様相からあるいは縄文時代の可能性もある。

10区270号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区B-12グリッド

規模：径約60cm、深さ約12cmを測る、浅い小型円形土

坑である。

重複：単独の検出である。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：焼土を伴う。土坑の項として報告したが、焼土遺構として取り扱うべき遺構である。時期は確定できないが、中世～近世と考える。

10区290号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区C・D-15グリッド

規模：長軸長約150×短軸長130cm、深さ80cmを測る不整楕円状の平面形を呈す。坑底面は凹凸が多く不連続な印象を得る。

重複：単独で調査された。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：時期の確定はできない。あるいは縄文時代の可能性もある。

10区291号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区E-4グリッド

規模：径約122×108cm、深さ約20cmの不整円形の浅い土坑である。

重複：重複遺構は無い。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：時期の確定はできない。あるいは縄文時代の可能性もある。

10区302号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区D・E-10グリッド

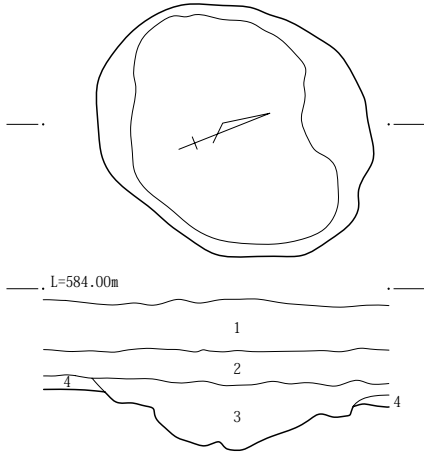
規模：約370×320cmの不整楕円状の大型土坑である。深さは64cmを測るが、壁の立ち上がりはやや弱い。

重複：単独で調査された。

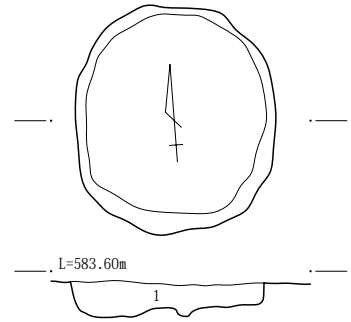
遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：人為遺構として、やや疑問符が付く。断面形や土層の観察から、風倒木痕など自然遺構として考えておきたい。時期は不明である。

10区290号土坑

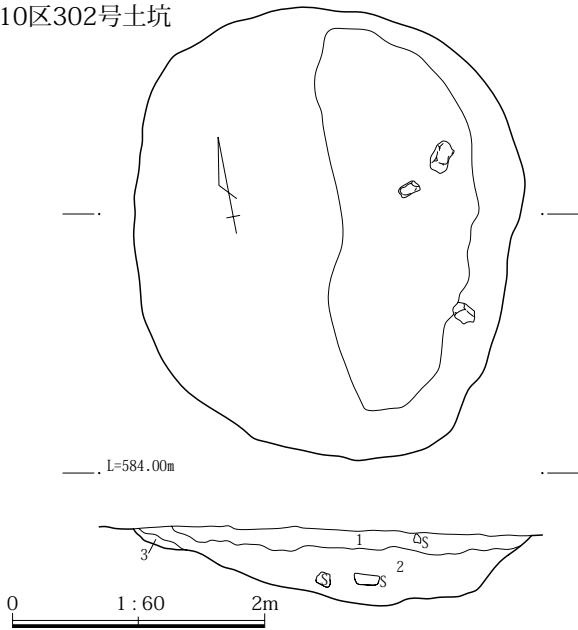


10区291号土坑

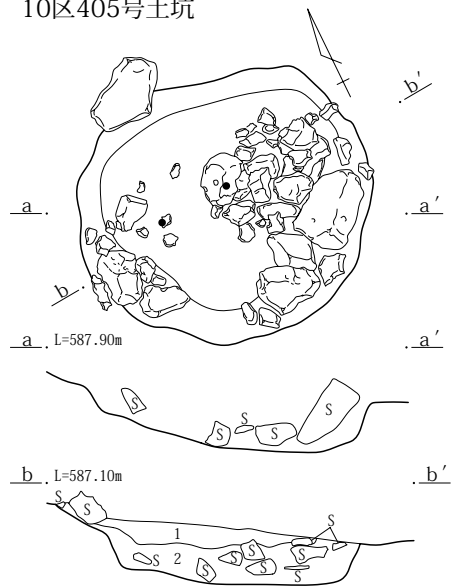


10区 290号土坑土層
 1 暗褐色土 表土。小礫を多く含む。縮まり弱い
 2 黒褐色土 小礫多く含む。縮まり弱い
 3 黒褐色土 小礫少量含む。縮まり弱い
 4 暗褐色土 大型礫・黄褐色土粒含む地山

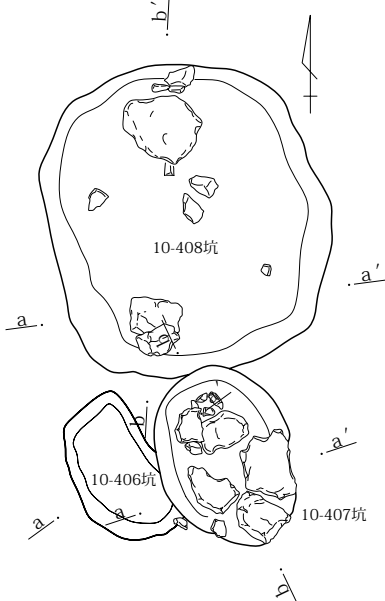
10区302号土坑



10区405号土坑



10区406~408号土坑



10-406・407坑
 a, L=587.00m .a'

10-408坑
 a, L=587.00m .a'

10-406坑 10-407坑
 1 2 S

1 2 3 4 3

10-407坑
 a, L=587.00m .a'

10-408坑
 b, L=587.00m .b'

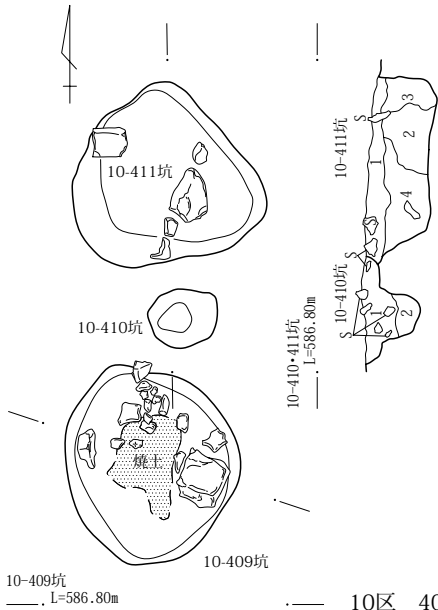
10-407坑
 b, L=587.00m .b'

10区 土坑土層
 1 暗褐色土 小礫を少量含む。縮まり弱い
 2 黒褐色土 小礫多く含む。縮まり強い
 3 黒褐色土 小礫少量含む。縮まり弱い
 4 黒褐色土 小礫微量含む。縮まり強い

0 1:40 1m

第117図 10区土坑 (古代・中世・近世) (3)

10区409~411号土坑



10区 411号土坑土層

- 1 暗褐色土 小礫を少量含む。締まり弱い
- 2 黒褐色土 小礫を微量含む。締まり弱い
- 3 暗褐色土 小礫を少量含む。締まり弱い
- 4 暗褐色土 小礫を微量含む。締まり強い

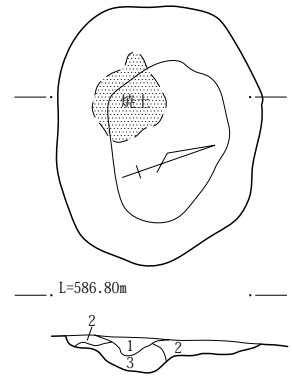
10区 410号土坑土層

- 1 黒褐色土 大型礫を多く含む。締まり弱い
- 2 黒褐色土 小礫を少量含む。締まり強い

10区 409号土坑土層

- 1 暗褐色土 小礫・焼土粒を少量含む。締まり弱い
- 2 暗褐色土 焼土塊を多く含む
- 3 黒褐色土 小礫少量含む。締まり弱い

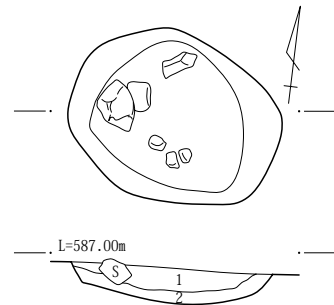
10区418号土坑



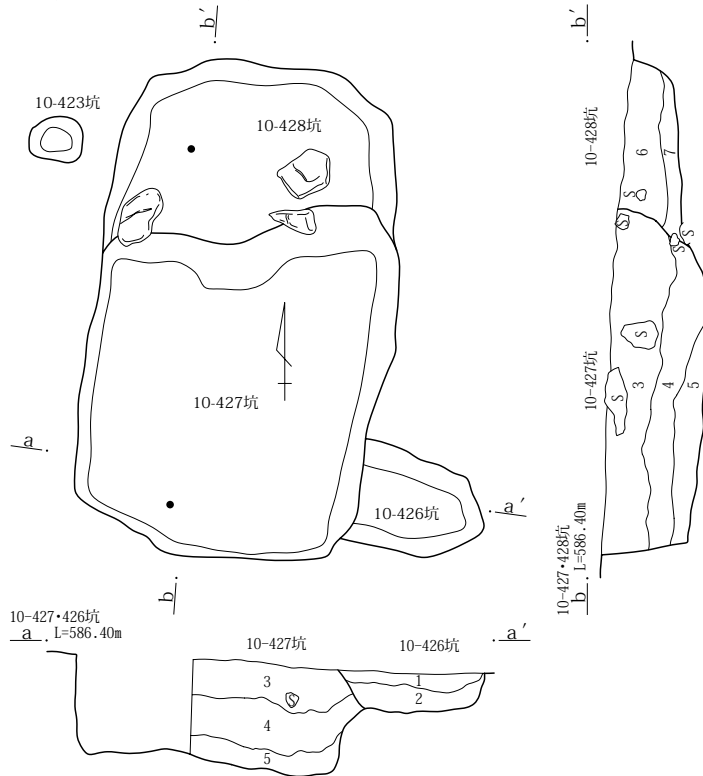
10区 418号土坑土層

- 1 暗褐色土 小型の焼土塊を多く含む
- 2 暗褐色土 焼土粒を少量含む
- 3 黒褐色土 小礫少量含む。締まり弱い

10区431号土坑



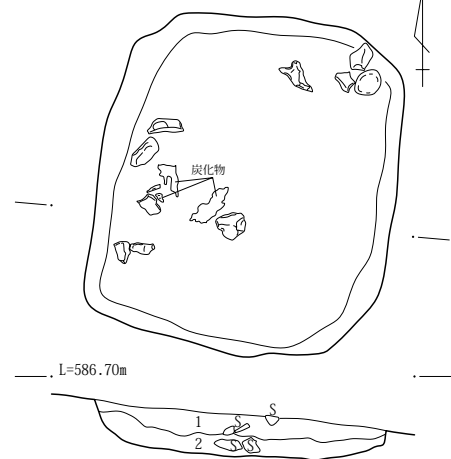
10区426~428号土坑



10区 427号・428号土坑土層

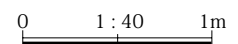
- 1 黒褐色土 小礫を少量含
- 2 黒褐色土 小礫多く含
- 3 暗褐色土 小礫少量含
- 4 暗褐色土 黄褐色土塊多く含
- 5 黒褐色土 小型の黄褐色土塊含
- 6 暗褐色土 小礫多く含
- 7 黒褐色土 黄褐色土塊含

10区433号土坑



10区 土坑土層

- 1 暗褐色土 小礫を少量含む。締まり弱い
- 2 黒褐色土 小礫多く含む。締まり強い
- 3 黒褐色土 小礫少量含む。締まり弱い
- 4 黒褐色土 小礫微量含む。締まり強い



第118図 10区土坑 (古代・中世・近世) (4)

10区405号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区J・K-10・11グリッド

規模：径約160×140cm、深さ42cmを測る、不整形円形を平面形とし鍋底状の断面形を示す。

重複：単独で調査された。西2.3mに408号土坑などが近接する。

遺物：大型の自然礫が底面にかけて南西側に集中する。その他では、内耳鍋破片、銅製品破片が出土した。

所見：土坑の性格は不確定だが、周辺は中世に比定される建物跡や土坑が集中する箇所である。本土坑も内耳鍋破片の出土から、中世に時期を求めたい。

10区406～408号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区J-10・11グリッド

規模：406坑：約80×50×17cmを測り、平面形は小型不整形形で、浅い皿状の断面形を呈する。407号土坑：約100×73×37cmを測り、不整形長方形の平面形を呈すが、本体は径70cmの不整形円形土坑である。408号土坑：約165×150×40cmでやや大型の方形を平面形とする。断面形は箱形でしっかりした壁の立ち上がりを示す。

重複：3基が上端を接するように重複する。土層の観察では、407号土坑が406号土坑を切る。408号土坑との新旧は不明である。

遺物：407号土坑からは、大型自然礫が埋土上層にまとまる。礫1点には炭化物付着による黒斑を見る。408号土坑からは、こね鉢口縁部破片が出土している。

所見：中世遺構の濃密な箇所に位置し、本土坑群も中世に時期を求めたい。

10区409～411号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区I-10グリッド

規模：409号土坑：約100×90×27cmで平面形は不整形円形で浅い皿状の断面形を示す。410号土坑：径約35cm、深さ約32cmのピット状の土坑である。411号土坑：径約100cm、深さ40cmを測る。不整形円形を平面形とする。

重複：410号土坑が北側で481号土坑と重なる。新旧は不明である。周辺は土坑群が群在する。

遺物：3基とも遺物の出土は見ない。

所見：409号土坑は上層に焼土塊を堆積する。焼土遺構である。410号土坑はピット状土坑だが柱痕は見られない。409号土坑と411号土坑は自然礫が集中する。性格は不明だが、周辺遺構との関連から中世に時期を求めたい。

10区418号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区M-16グリッド

規模：不整形楕円状の平面形で、約137×108×20を測る。坑底面は凹凸があり、不連続である。

重複：単独で調査された。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：上層に焼土が集まる。小範囲ながら焼土遺構として位置付けられよう。

10区426～428号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区K・L-15グリッド

規模：426号土坑：-×55×23cm。楕円状の平面形を呈す。427号土坑：190×160×60cm。不整形方形を呈し、箱形の断面形を示す。428号土坑：148×-×34cm。不整形方形を呈す。

重複：3基が重複する。新旧関係は土層観察から、426号土坑が新しく、427号土坑が428号土坑を切る。426坑→427坑→428坑である。

遺物：少量の縄文土器片が出土したが、本遺構に伴う例ではない。

所見：10区調査区中央の中世遺構群の中にあることから、時期を中世と考えたいが確定できない。

10区431号土坑

調査年度：平成17年度

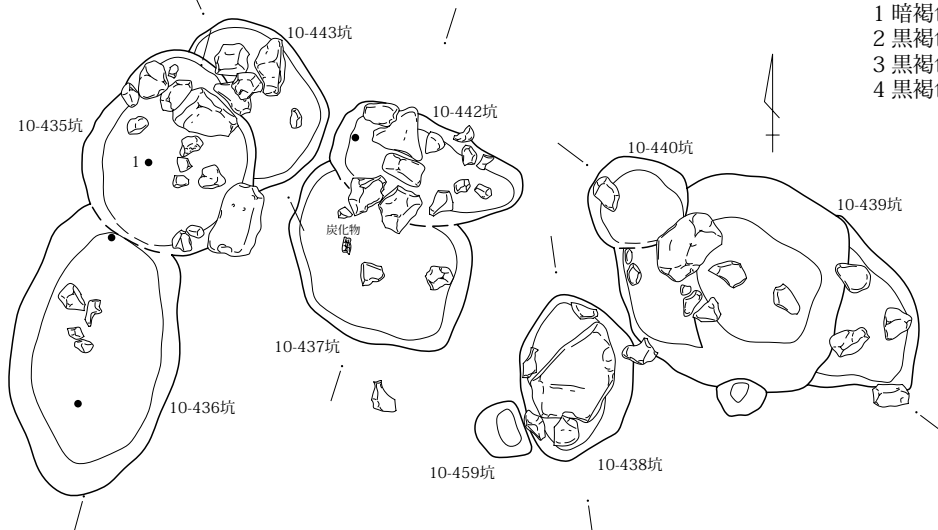
位置：10区H・I-12・13グリッド

規模：径約110×90を測る不整形円形を平面形とする。深さは23cmを測り、やや浅く皿状の断面形である。

重複：重複遺構は無い。

遺物：埋土中より中型礫の出土を見るが、図示し得る遺物は見られなかった。

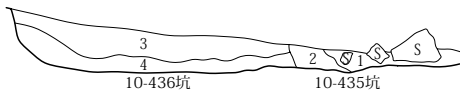
10区435~440・442・443・459号土坑



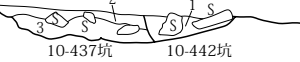
10区 土坑土層

- 1 暗褐色土 小礫を少量含む。締まり弱い
- 2 黒褐色土 小礫多く含む。締まり強い
- 3 黒褐色土 小礫少量含む。締まり弱い
- 4 黒褐色土 小礫微量含む。しまり強い

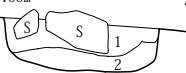
10-435,436坑
L=586.40m



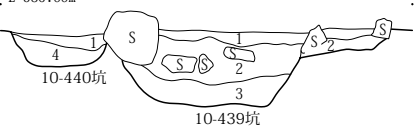
10-437,442坑
L=586.00m



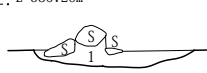
10-438坑
L=586.00m



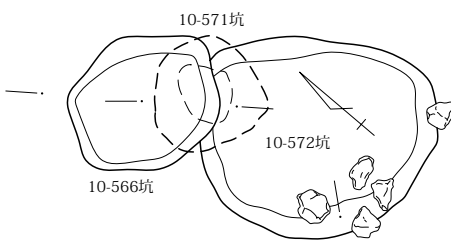
10-439,440坑
L=586.00m



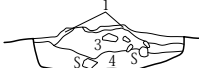
10-443坑
L=586.20m



10区566・572号土坑

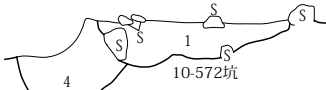


10-566坑
L=587.00m

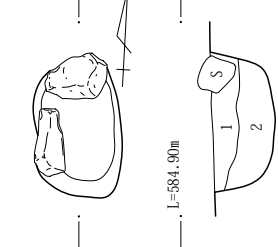


10区599号土坑

10-571,572坑
L=587.00m

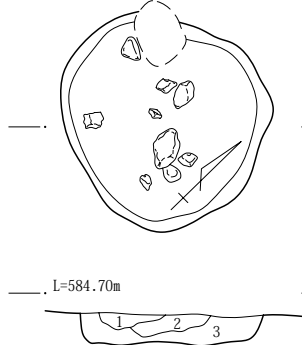


10-571坑



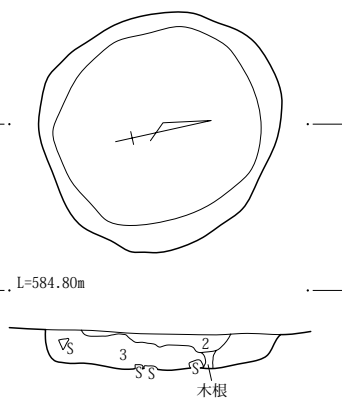
L=584.90m

10区601号土坑



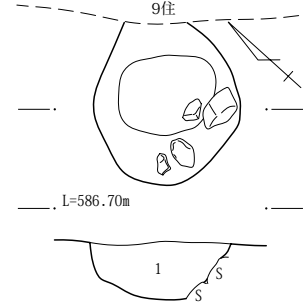
L=584.70m

10区602号土坑

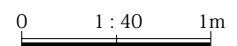


L=584.80m

10区613号土坑



L=586.70m



第119図 10区土坑 (古代・中世・近世) (5)

所見：後述する437号土坑などの中世土坑群に近接する。時期は確定できないが、中世の可能性もある。

10区433号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区J-11グリッド

規模：平面形は不整正方形を呈す。約180×160×30cmの規模で、断面形はやや浅い皿状である。

重複：重複遺構は無く、単独で調査された。

遺物：上層から底面にかけて自然礫が散漫に出土する。埋土中より内耳鍋口縁部破片が出土している。

所見：時期は、周辺の中世遺構群の存在や内耳鍋破片の出土から中世と考えたい。性格は確定できない。

10区435～440・442・443・459号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区I・J-13グリッド

規模：435号土坑：径約110×95cm、深さ約15cmの不整円形を平面形とする。436号土坑：約139×89×34cmで不整楕円状の平面形を呈す。437号土坑：約102×67×19cmで不整楕円状を呈す。438号土坑：約84×60×28cmで不整楕円状を呈す。439号土坑：約150×117×41cmで不整方形を呈す。440号土坑：径約50cm、深さ19cmを測るピット状の土坑である。442号土坑：約103×54×14cmで不整楕円状を呈す。443号土坑：約90×46×10で不整楕円状を示す。459号土坑：径約29cm、深さ24cmの小ピット状土坑である。各土坑は浅く、皿状の断面形を示している。

重複：土坑群は重複を重ね東西に連なる。435号坑は436坑と443坑と重複し436坑を切る。437坑は442坑と重複するが、新旧は不明である。439坑と440坑の重複も接点の大型礫の存在で不明である。

遺物：435号土坑からは銭貨1点、442号土坑からは内耳鍋口縁部破片が2点出土している。

所見：不整形土坑で規格性に乏しい土坑群であるが、出土遺物から中世に時期を求めたい。

10区566・572号土坑

調査年度：平成17年度

位置：P・Q-19・20グリッド

規模：566号土坑：径約70×80cm、深さ24cmの不整円

形を平面形とし、浅い皿状の断面形を呈す。572号土坑：長軸長126cm、短軸長107cm、深さ24cmの不整楕円状を呈する。断面形は浅い皿状である。

重複：両土坑に挟まれて571号土坑が重複する。新旧は、571号土坑が両土坑に切られる土層を観察した。

遺物：両土坑とも平安時代の須恵器杯・埴類、土師器甕類を出土する。

所見：北東・北西に9世紀代の8号住居跡と9号住居跡が近接する。本土坑も9世紀代後半に時期を求めたい。

10区599号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区P-24グリッド（観音堂区）

規模：小型の楕円状を平面形とする。規模は約78×45cmで深さは36cmを測る。しっかりした掘り込みで箱形の断面形を示す。

重複：単独で調査された。

遺物：大型の自然礫を上層に出土する。出土土器は縄文土器細片を見るが、本遺構に伴う例ではない。

所見：時期は確定できない。観音堂区での検出で平面形状から、中世～近世の墓塚としての位置付けも可能である。

10区601号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区N・O-24・25グリッド（観音堂区）

規模：径約115×108を測る円形土坑で、深さは約18cmと浅い。

重複：観音堂区で10号掘立柱建物跡P3と重なる。新旧はおそらくP3が本土坑を切るものとする。

遺物：底面より浮いた状態で小型の自然礫が出土したが、他に出土遺物を見ない。

所見：時期・性格も不確定である。

10区602号土坑

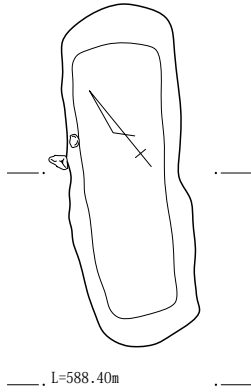
調査年度：平成17年度

位置：10区O-25グリッド（観音堂区）

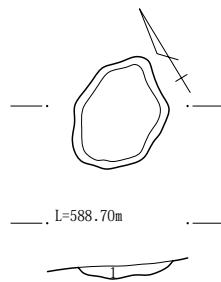
規模：径約123～129、深さ22cmを測る浅い円形土坑である。

重複：10号掘立柱建物跡P10が本土坑を切る重複関係

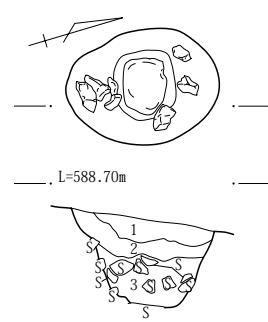
11区1号土坑



11区2号土坑



11区3号土坑



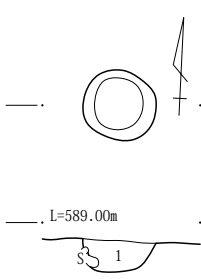
11区 土坑土層

1 黒褐色土 角礫・暗褐色土塊少量含む。締まり弱い

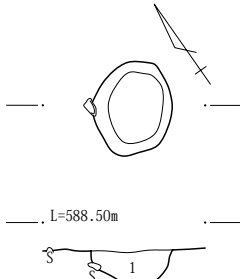
11区 3号土坑土層

1 黒褐色土 角礫を少量含む。締まり弱い
2 暗褐色土 角礫多く、炭化物微量含む。締まり強い
3 黒褐色土 径3～5cmの角礫を多量に含む

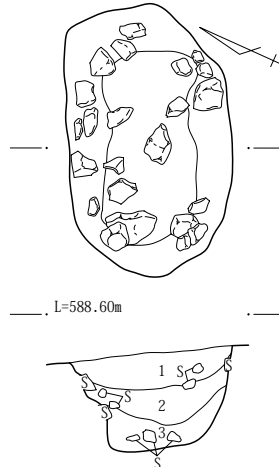
11区4号土坑



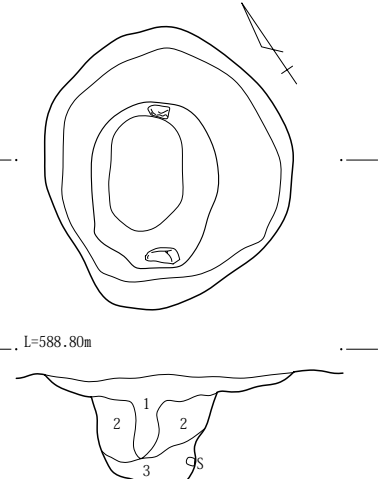
11区5号土坑



11区6号土坑



11区7号土坑



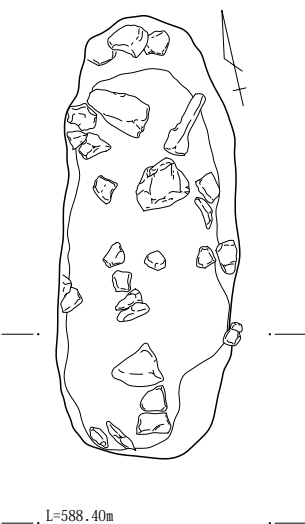
11区 6号土坑土層

1 黒褐色土 黄褐色土粒多く含む。炭化物少量含む
2 黒褐色土 黄褐色土粒少量含む
3 暗褐色土 小礫少量含む

11区 7号土坑土層

1 黒褐色土 黄褐色土粒多く含む。炭化物微量含む
2 黒褐色土 暗褐色土塊少量含む
3 黒褐色土 黄褐色土粒少量含む

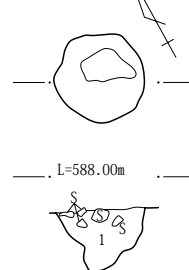
11区8号土坑



11区 8号土坑土層

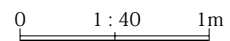
1 黒褐色土 黄褐色土粒多く含む。炭化物微量含む
2 黒褐色土 暗褐色土塊少量含む
3 黒褐色土 黄褐色土粒少量含む。炭化物微量含む

11区9号土坑



11区 9号土坑土層

1 黒褐色土 角礫・暗褐色土塊少量含む。締まり弱い



第120図 11区土坑 (古代・中世・近世)

である。故に、601号土坑と602号土坑は10号掘立柱建物跡が示す建築物に先行する施設として位置付けられよう。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：同規模の601号土坑と近接するが、時期・性格とも不確定である。

10区613号土坑

調査年度：平成17年度

位置：10区Q-21グリッド

規模：径約80cm、深さ約30cmを測る小型の円形土坑である。

重複：9号住居跡西壁と重複する。新旧関係は不明である。

遺物：出土遺物は見られない。

所見：時期は不確定である。

11区1号土坑

調査年度：平成17年度

位置：11区B・C-1・2グリッド

規模：平面形は、長軸長約181×短軸長66cmを測る長方形である。深さは32cmである。断面形はしっかりした箱形である。

重複：単独の調査である

遺物：出土遺物は見られない。

所見：時期は確定できない。土層の様相と土坑形態から近世～近代の所産か。

11区2号土坑

調査年度：平成17年度

位置：11区C-1グリッド

規模：不整楕円形を平面形とし浅い皿状の断面を示す。規模は約62×47×10cmである。

重複：重複遺構は無い。

遺物：出土遺物は見られない。

所見：時期は確定できない。

11区3号土坑

調査年度：平成17年度

位置：11区C-1グリッド

規模：約81×61×52cmの楕円状の平面形を呈し、掘り込みもしっかりしていた。

重複：重複遺構は無い。

遺物：土器等の遺物は見られなかった。埋土中位より中型礫が多く出土した。

所見：時期・性格など確定できない。

11区4号土坑

調査年度：平成17年度

位置：11区C-1グリッド

規模：径約37cm、深さ12cmのピット状の土坑である。

重複：重複遺構は無い。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：時期・性格は確定できない。

11区5号土坑

調査年度：平成17年度

位置：11区D-2グリッド

規模：径約50×42cm、深さ19cmのピット状の土坑である。

重複：重複遺構は無い。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：時期・性格は確定できない。

11区6号土坑

調査年度：平成17年度

位置：11区C・D-2グリッド

規模：楕円状の平面形を呈す。長軸長約144×短軸長86cm、深さ56cmの中規模の土坑である。掘り込みもしっかりしていた。

重複：重複遺構は無い。

遺物：上層から底面にかけて自然礫が多く出土している。流入と考えた。

所見：時期・性格は確定できない。

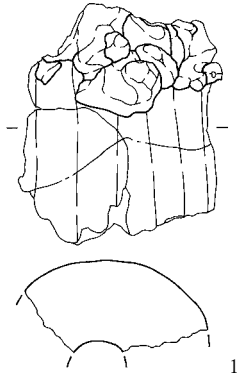
11区7号土坑

調査年度：平成17年度

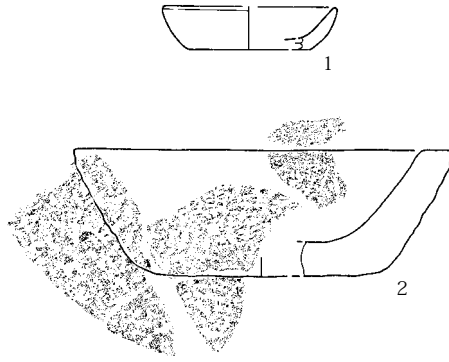
位置：11区B・C-1グリッド

規模：約150×131cmを測るやや大型の不整円形土坑である。深さは60cmで掘り込みもしっかりしていた。

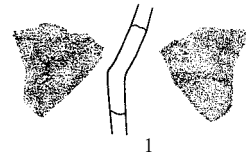
9区7号土坑



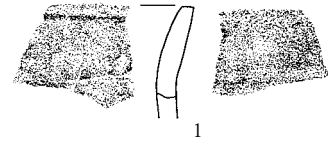
10区1号土坑



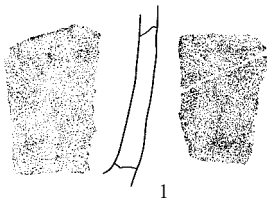
62号土坑



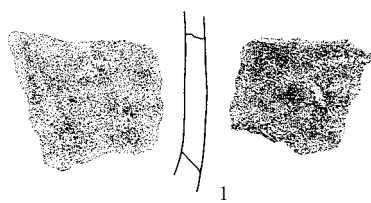
85号土坑



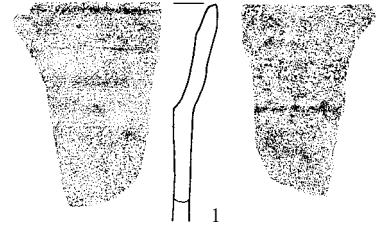
125号土坑



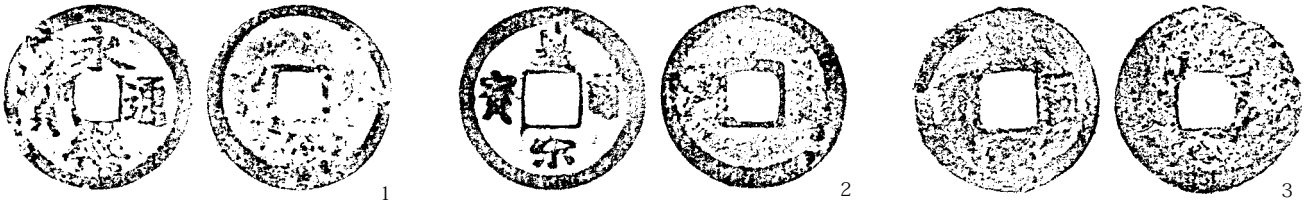
130号土坑



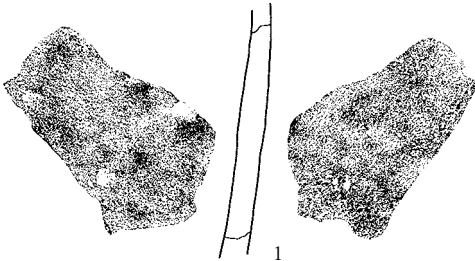
138号土坑



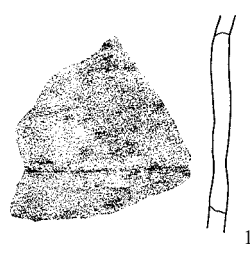
147号土坑



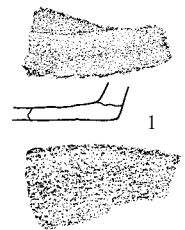
206号土坑



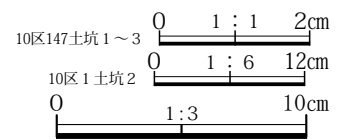
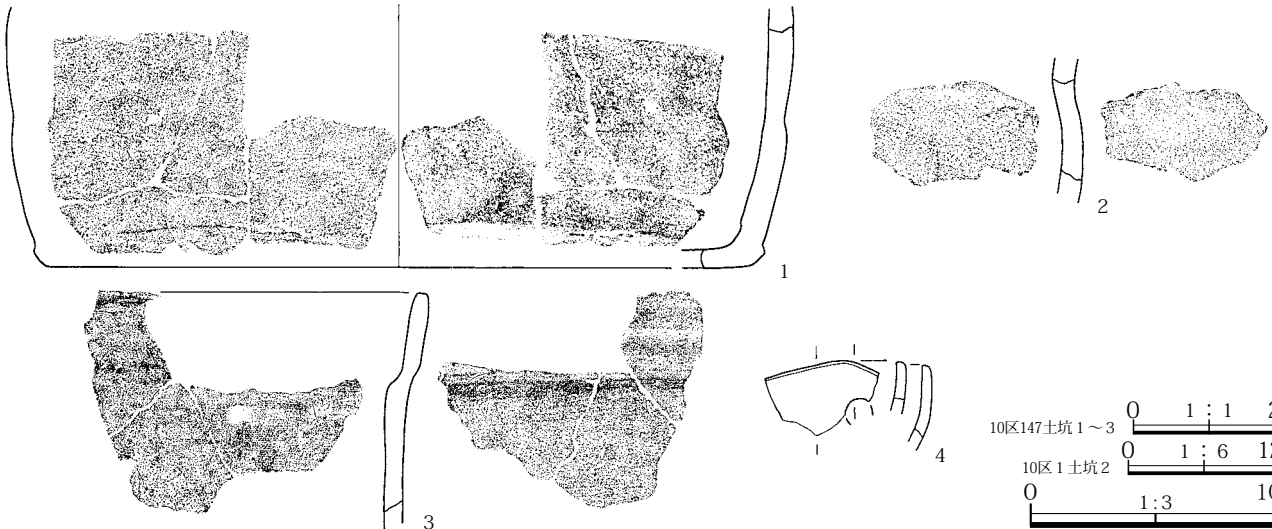
304号土坑



306坑

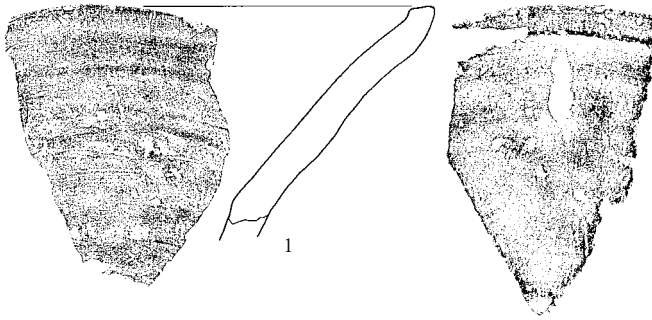


405号土坑

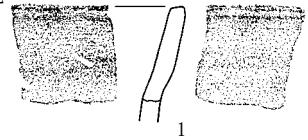


第121図 9・10区土坑（古代・中世・近世）出土遺物（1）

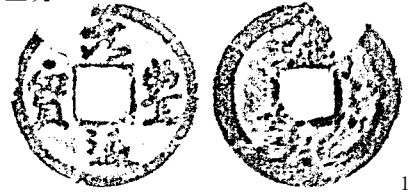
408号土坑



433号土坑



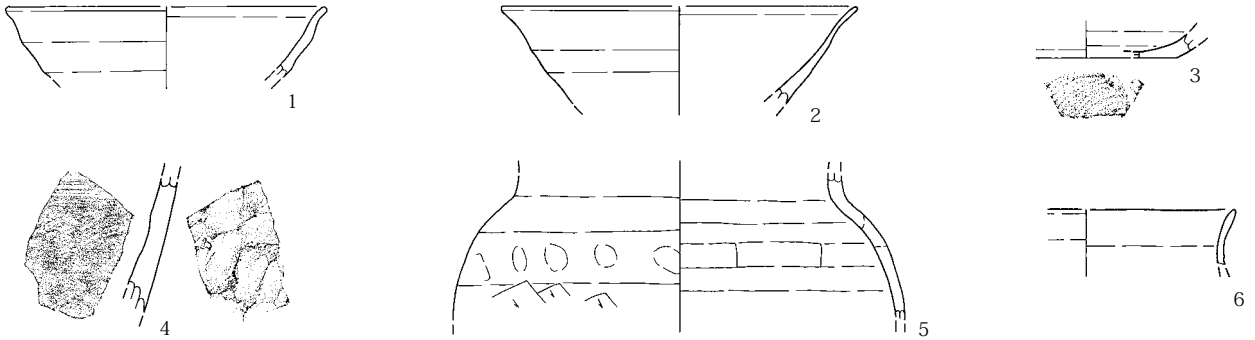
435号土坑



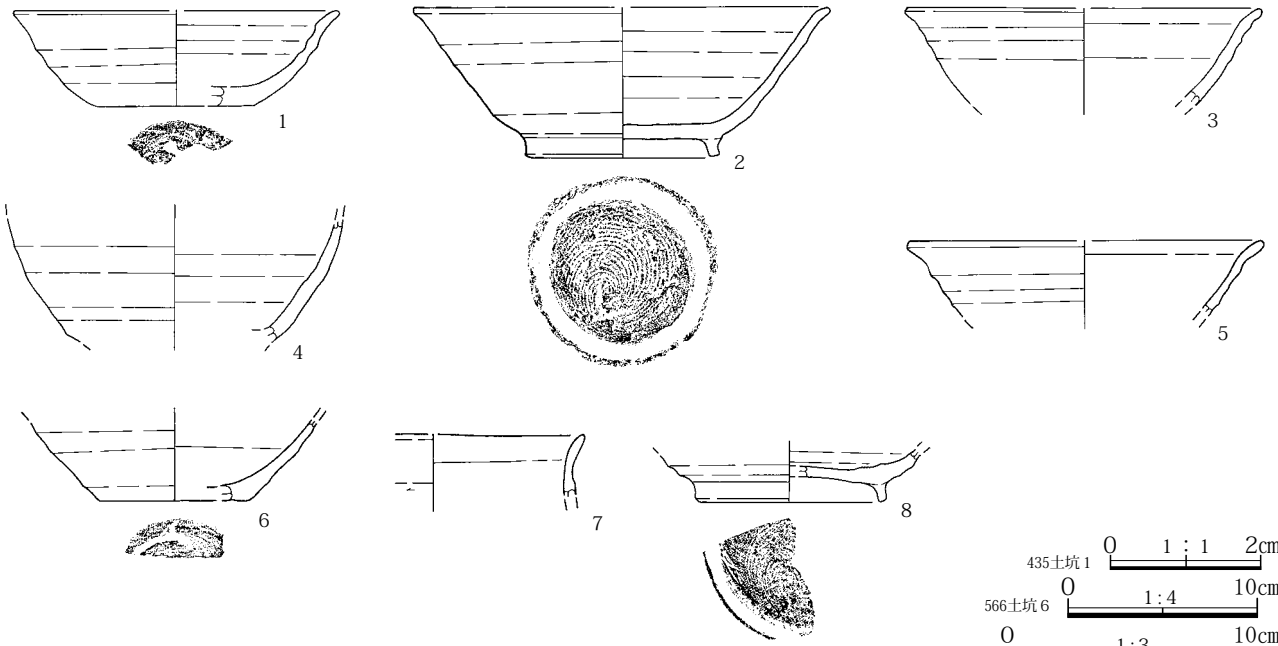
442号土坑



566号土坑



572号土坑



第122図 10区土坑（古代・中世・近世）出土遺物（2）

重複：重複遺構は無い。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：土坑上位で有段となり、楕円状の平面形となる。

時期・性格は確定できない。

11区8号土坑

調査年度：平成17年度

位置：11区B-1・2グリッド

規模：長楕円状の土坑である。長軸長約236×短軸長95cmで、深さは約45cmを測る。

重複：重複遺構は無い。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：基盤礫の露出が著しく、本土坑埋土にも礫が混在する。時期・性格は確定できないが、土坑形状・埋土の様相から近世の所産であろうか。

11区9号土坑

調査年度：平成17年度

位置：11区A-1グリッド

規模：径約47cm、深さ34cmのピット状の土坑である。不整楕円状の平面形を呈す。

重複：重複遺構は無い。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：時期・性格は確定できない。

11区土坑は斜面地形に点在する様相を示し、出土遺物もなく、時期の確定には至らなかった。平面形状や埋土の様相から近世～近代と捉えたが、6号土坑や7号土坑はあるいは縄文時代の可能性も指摘しておきたい。また、前節で挙げたように、11区遺構外出土遺物には弥生時代の土器片が少なからず出土している。弥生時代の可能性も踏まえておくべきであろう。

11 観音堂区 (第123～171図/PL21～27)

平成17年度と18年度に調査された、10区の北西部と20区南西部に跨がる調査区を併せて観音堂区とした。本来ならば、10区と20区に分別して編集する報告方針であるが、当調査区には、中世～近世の遺構が集中するため、まとめた調査区として報告する。なお、周辺にも中・近世遺構は点在する。特に『横壁中村遺跡10』で報告した

ように、20区には中世屋敷跡や墓壇があり、観音堂区及びその周辺との関連性は強い。10区と20区を併せた総合的な判断は今後の課題となろう。

横壁中村遺跡がある地区の大字名は「観音堂」と呼称されているように、本遺跡には、かつて地元の信仰の対象であった観音堂があるといわれていた。平成17年度から18年度にかけての調査は、遺跡を横断する村道1号線直下とその周辺である。観音堂区はほぼその調査区に相当する地点であり、「観音堂」相当の遺構群が発掘されたのである。

当地区の調査を広く進めてきた、横壁中村遺跡発掘調査で、調査最終年度に近い平成17年度と18年度に観音堂に相当する施設が調査されたのは、偶然とはいえ示唆的な遺構群といえよう。

調査では、「観音堂」を囲む石垣(20区1・2号石垣)、「観音堂」と目される9・10号掘立柱建物跡が確認され、これらの「観音堂」関連の遺構が乗る、縄文時代の土坑や平安時代の123号住居跡、中世～近世に比定される墓壇群・集石遺構が調査された。

ここでは、縄文時代の土坑と平安時代の123号住居跡は除外し、「観音堂」関連遺構である、20区1・2号石垣と9・10号掘立柱建物跡、「観音堂」建立直前とも目される墓壇群などを報告する。

さらに、20区1・2号石垣やその周辺、西にやや距離を置く1号塚から、多量の経石が出土している。こちらをも併せて観音堂区の遺構・遺物として報告したい。

観音堂区周辺は、南側から北側への斜面地形の連続にあり、当地区のみが平坦面を築きあげている。9・10号掘立柱建物跡設定の際の削平が行われたものと把握できる。さらに、東側と北側は1号石垣と2号石垣を設けるため、掘削により段差を作出している。この平坦面と段差が、「観音堂」建立に伴う行為かは、厳密には不確定と言わざるを得ないが、当地区には、9・10号掘立柱建物跡・1・2号石垣以外にも、墓壇も群在しており、墓域としての削平行為が重なり、平坦面や段差が形成されたものと考えたい。

いずれにしても、当地区は「観音堂」、墓壇群が集中する、地域にとっても聖域に等しい場所として位置付けられる。

(1) 掘立柱建物跡

10区9・10号掘立柱建物跡 (第127図/PL22)

位置：10区N・0-24・25グリッド

規模：2棟が重複する掘立柱建物跡である。ほぼ同規模であり、「観音堂」としての位置付けを図る意味で、同時に記載する。長軸長約6.2×短軸長3.7mを測り、平面形は長方形を呈する。主軸方位を西北西に向ける、2間×3間の小型の掘立柱建物である。

重複：9・10号掘立柱建物跡相互が重複しているが、柱穴の重複が僅かなため、新旧関係は確定できない。また、601号土坑と602号土坑が10号掘立柱建物跡の柱穴と重複するが、土層観察の結果、10号掘立柱建物跡が両土坑を切る新旧を得ている。

遺物：9号掘立柱建物跡P6より銭貨6点が出土している。凝着しており、3点の図示に留まる。P6は9号掘立柱建物跡南辺の延長にある不整形ピットであり、必ずしも9号掘立柱建物主体を構成する柱穴ではない。検討を要する。

所見：「観音堂」と位置づけられる掘立柱建物跡である。北西隅が攪乱されており、全体像が判然としないが、重複の様相から、2回の以上の建て替えが行われていた可能性が高い。2間×3間の規模を基本とした総柱状の建物を想定するが、南西隅の屈曲する石垣基部の位置から、出入り口は南側と思われる。この場合、拝殿部を北側に想定するが、柱穴の配置からは積極性を持ってない。

小型の掘立柱建物跡であるが、堂宇としての「観音堂」相当の規模であり、位置的にも「観音堂」と判断できる。中世以降墓域として位置付けられる範囲に、「観音堂」が建立されていたことになる。既報告の20区屋敷跡や本書で扱った3号建物跡・1～6号掘立柱建物跡とはやや距離を置く位置にある。

時期は、出土遺物として挙げた古銭が中世に比定されるが、建物を主に構成する柱穴からの出土ではないため、中世以降の所産と位置付けたい。詳細は後述するが、「観音堂」の建立は、貞享元年(1684)とされている。江戸時代前期である。

(2) 石垣 (第128～130図/PL22・23)

20区1号石垣と2号石垣を調査している。両石垣とも10区に跨がる。そのため、表記は10-20区としているが、「観音堂」を区画する施設である。

観音堂は概ね南北11.2×8.3mの範囲に設けられる。石垣はこの範囲を囲む施設として、東側は1号石垣と2号石垣が平行し、東側の段差を補強する形態を示している。北側は2号石垣が屈曲し、これを2b号石垣とした。西側は2号石垣がさらに南側へ延びるが、北半の走行のみが確認されている。南側の区画は、攪乱により確認できなかった。

10-20区1号石垣

調査年度：平成17・18年度

位置：a：10区M・N-23～25、20区M-1グリッド

b：10区F～L-19～23グリッド

1号石垣bは、観音堂区から東へ距離を置いて所在するが、1号石垣a南端の屈曲の延長に一致するため、同列の石垣と考えた。

規模：南北長約13.1×高さ1.4m

東西長約33.2×高さ1.6m

重複：重複遺構は無い。

遺物：銭貨(寛永通寶)、煙管などの出土を見る。また、天端部分から経石のまとまりを見ている。経石の平断面分布を130図に示したが、これは平成17年度調査の記録であり、平成18年度調査では、おびただしい量の経石が観音堂区に広がりを見せたため、原位置記録を取っていない。

所見：観音堂区東側で2号石垣と平行し、南側で屈曲し東に長く延長する。この東西の動線は現道と一致し、「観音堂」が東西の道沿いに建てられていた様相が把握されよう。時期は石垣の性格上、中世～近代と時間幅を持たせたい。経石以外の出土遺物は近世に比定されよう。

10-20区2号石垣

調査年度：平成17・18年度

位置：10区M・N-23～25グリッド

規模：a：軸長13.5m、高さ0.7m

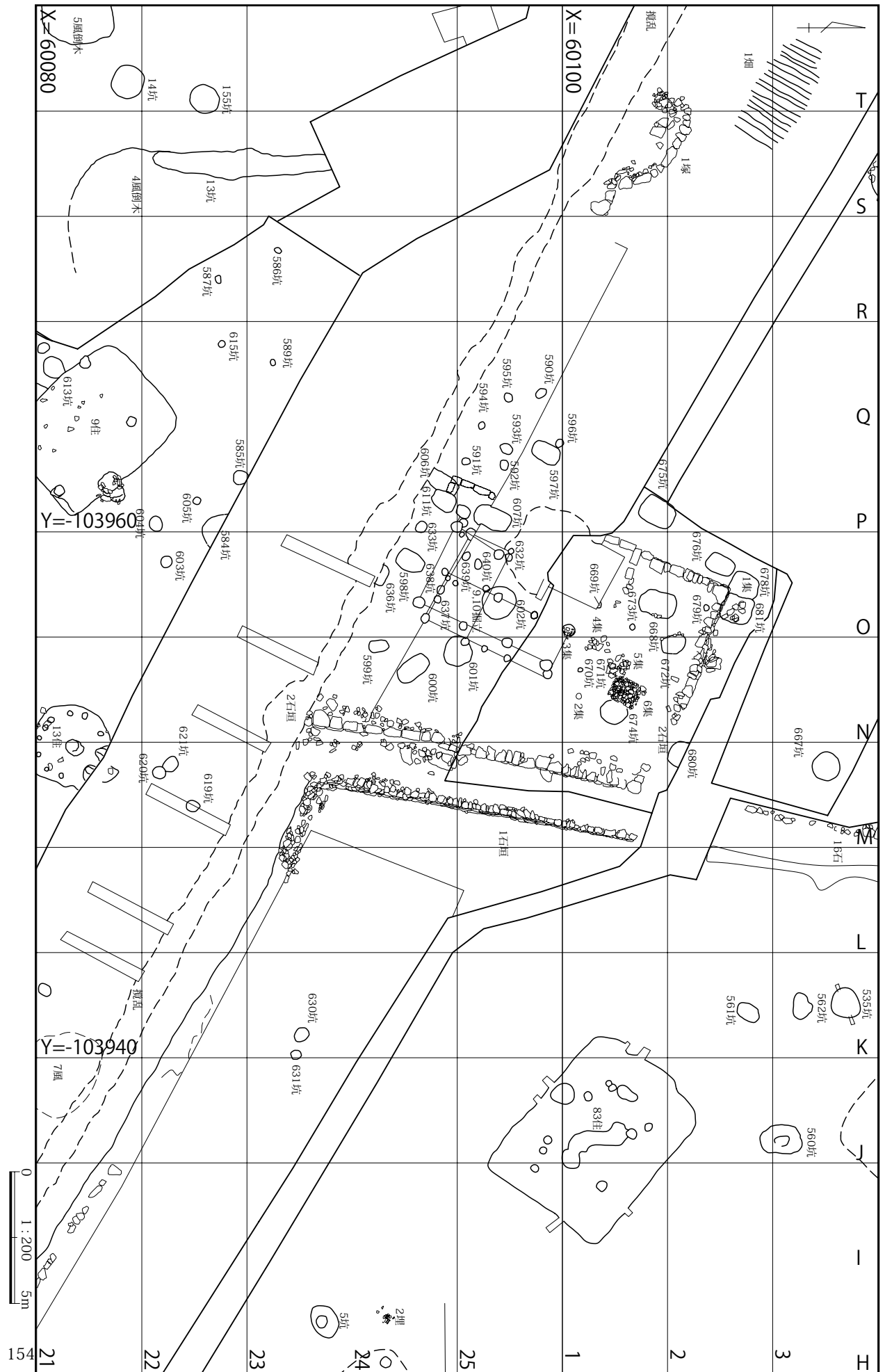
b：軸長5.6m、高さ0.6m

c：軸長5.1m、高さ0.3m

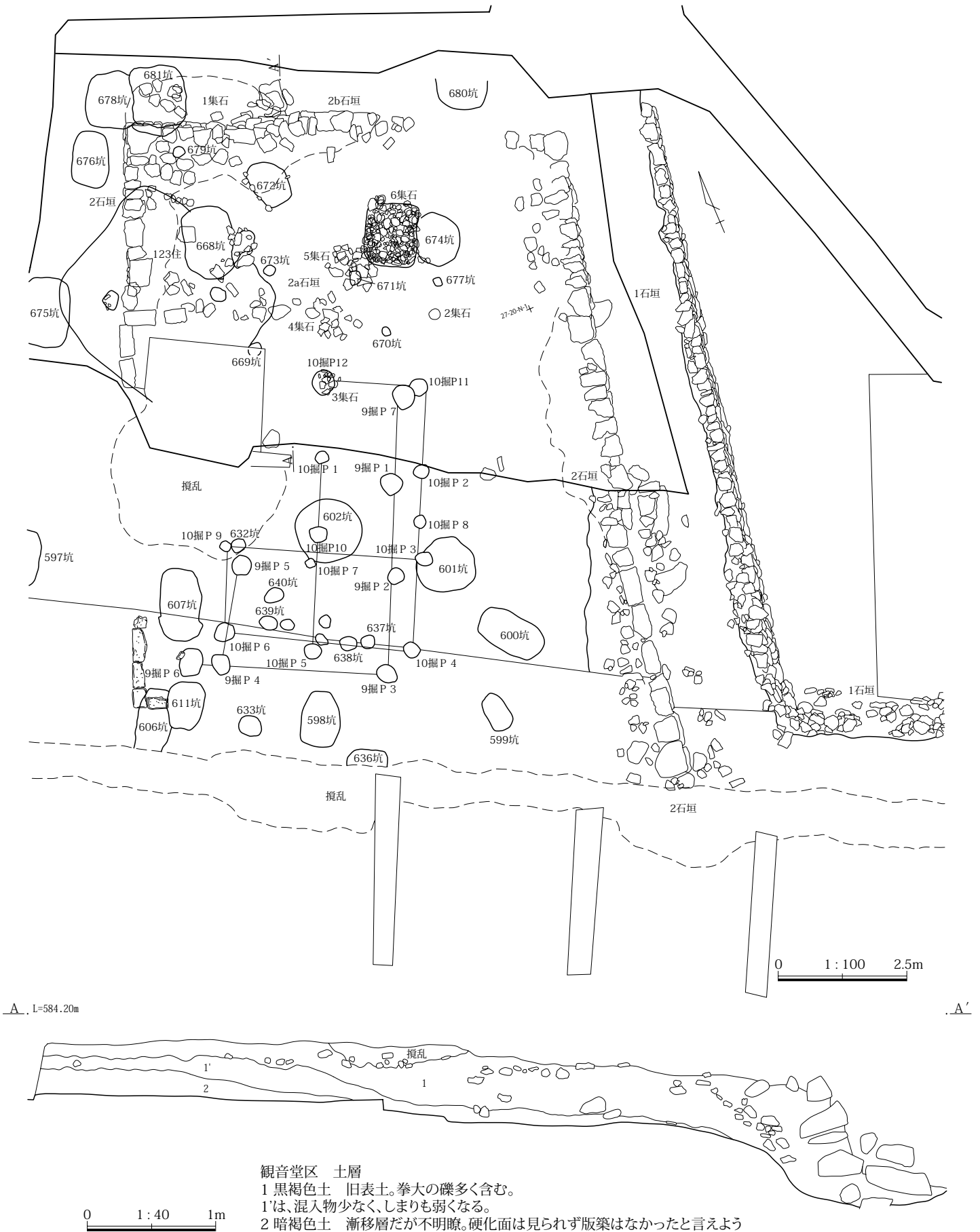
d：軸長1.8m、高さ0.2m

重複：2b石垣が678号土坑、681号土坑の上に乗る。2d石垣が606号土坑を切る。各土坑は中世の所産である。

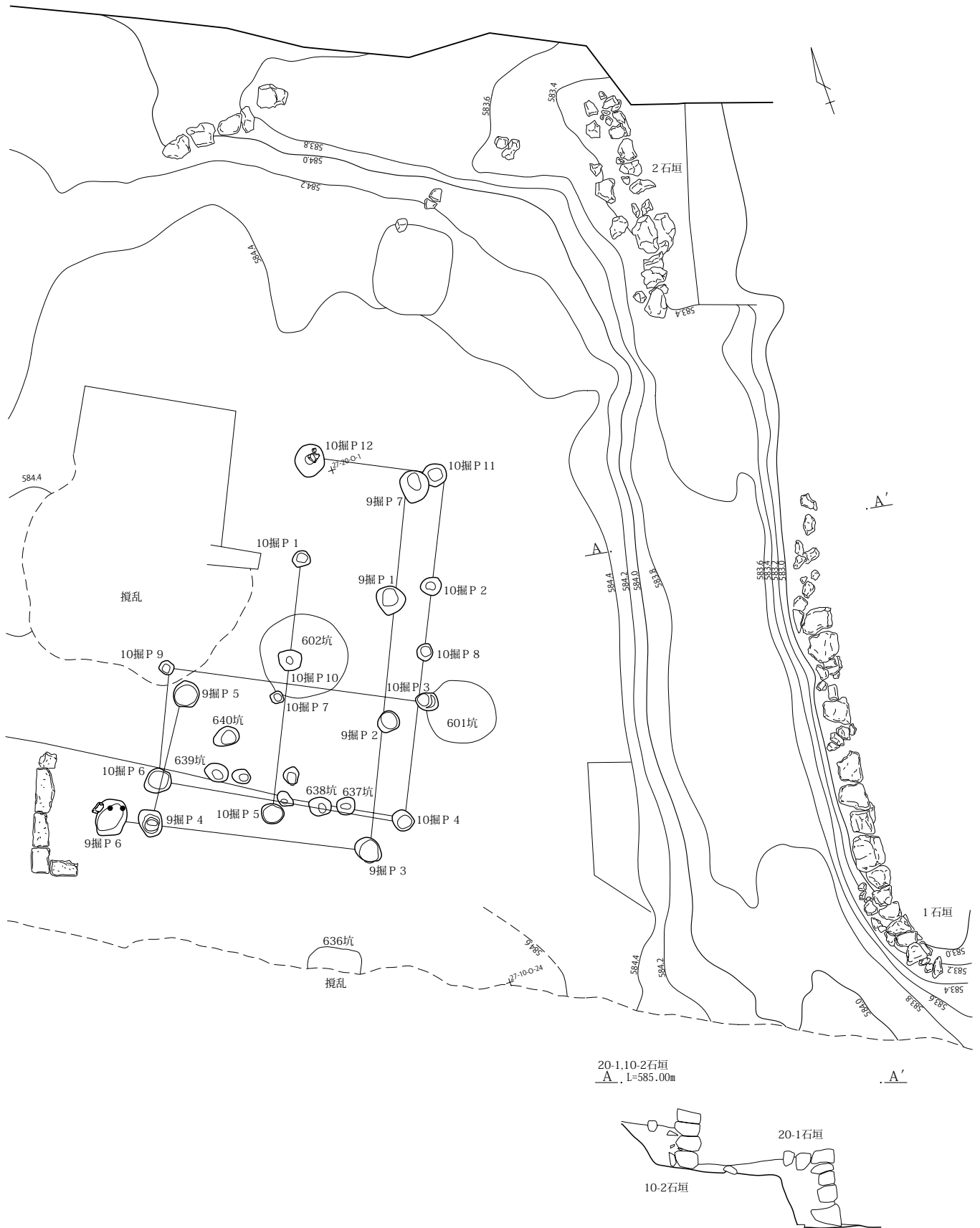
遺物：磁器蓋、カワラケ、火打ち金、煙管、経石・銭



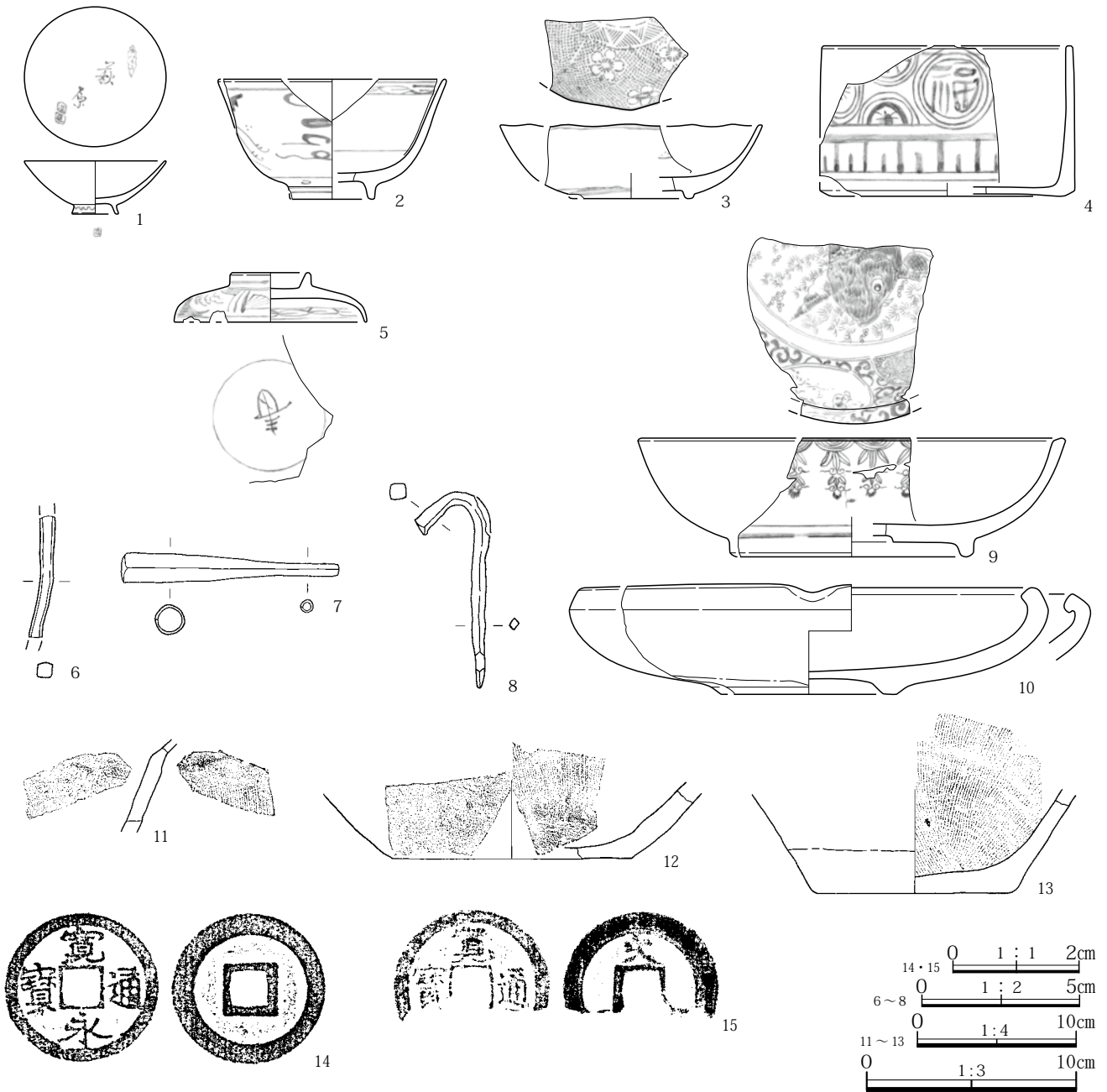
第123図 観音堂区全体図



第124図 観音堂区遺構配置図



第125図 観音堂区基盤全体図



第126図 観音堂区出土遺物

貨2点の出土を見る。出土遺物の示唆する時間幅は広く、
 確定的な時期を示していない。

所見：2号石垣は1号石垣の西側に平行し、9・10号
 掘立柱建物跡を囲むように、北側から西側へ設けられ
 る、観音堂内郭を形成する石垣である。北側を2号石垣
 b、西側北半を2号石垣c、西側南端を2号石垣dとした。
 東側と北側の2号石垣bが良好である。2号石垣cは中位
 で東側へ延び、9・10号掘立柱建物跡を囲む。

このように、2号石垣は「観音堂」を画する石垣施設
 である。出土遺物の時間幅が広いように、中世～近世・
 近代にかけて機能していたようだ。

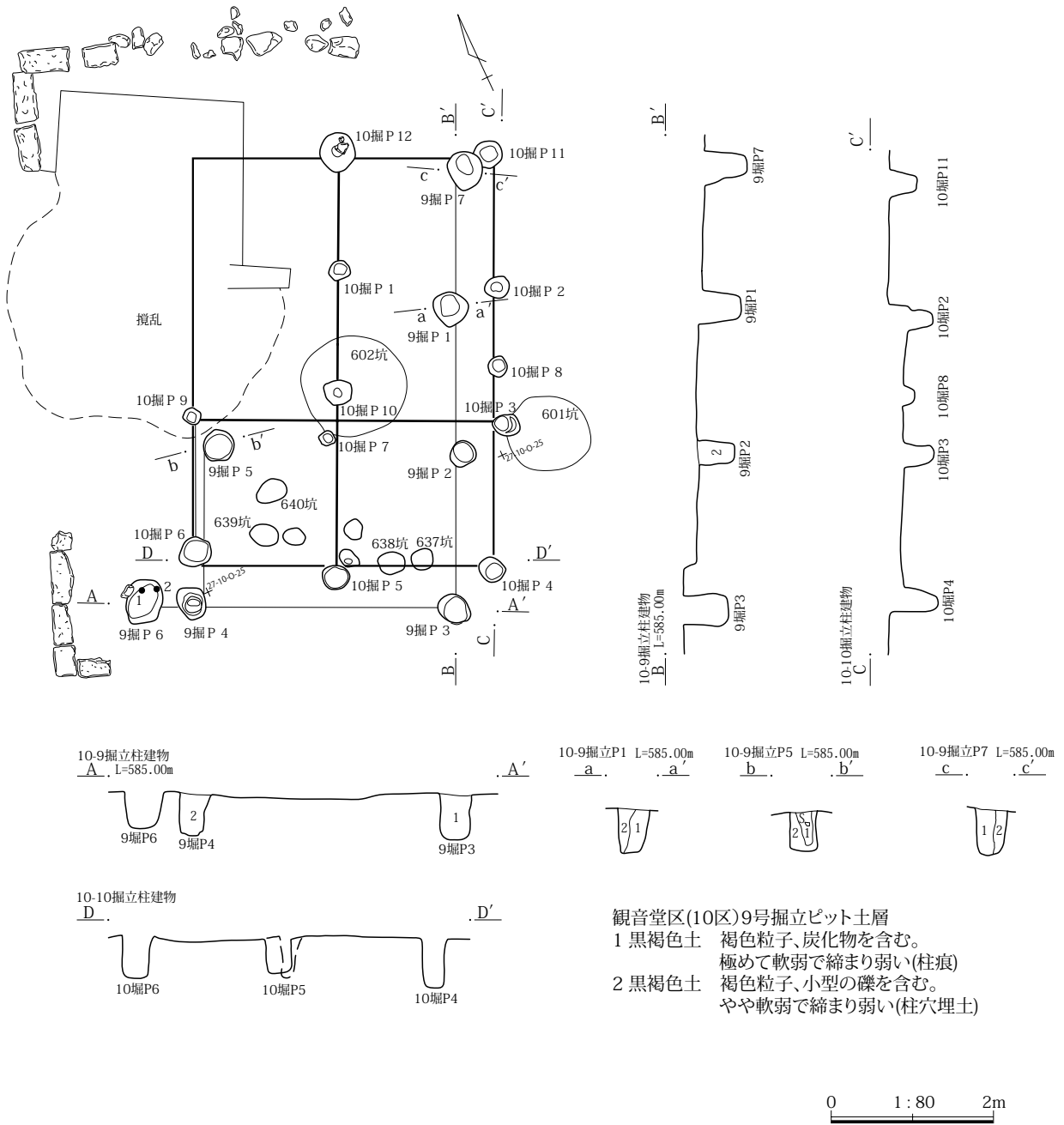
(3) 塚

10区1号塚 (第131・132図/PL23・24)

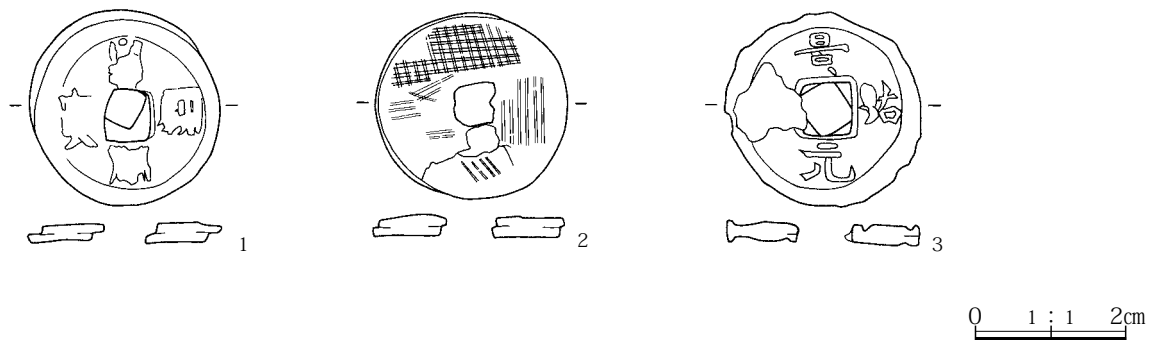
調査年度：平成17年度

位置：20区S・T-1・2グリッド。「観音堂」区画から
 は西に距離を置き、9・10号掘立柱建物跡とは18mほど
 離れる。遺跡を横断する現道下からの検出となった。

規模：長軸約5.6m×短軸1.8m、石垣の高さ約0.6m。
 10区西端で調査された。北東側を石垣状に組み上げ、南
 西は開放する。北東側の石垣は弧状を呈し、内縁に掘り
 込みは持たない。石垣の段数は2・3段を数え大型の自
 然石を組み上げている。



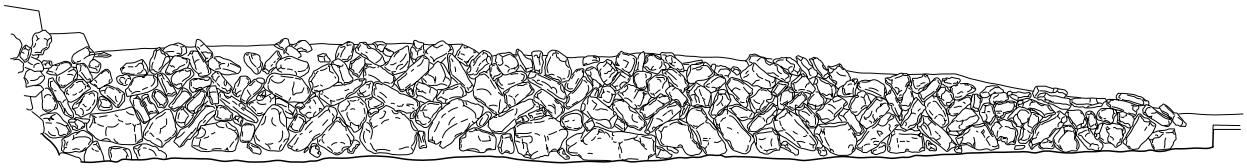
9号掘立



第127図 観音堂区(9・10号掘立柱建物跡)・出土遺物

20-1石垣
A, L=585.00m

A'



20-2石垣東壁
B, L=585.40m

B'



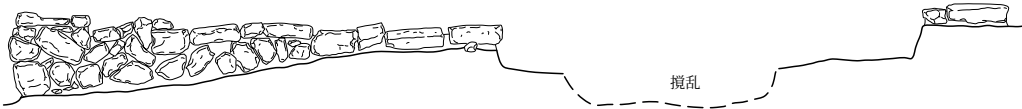
20-2石垣北壁
C, L=585.40m

C'



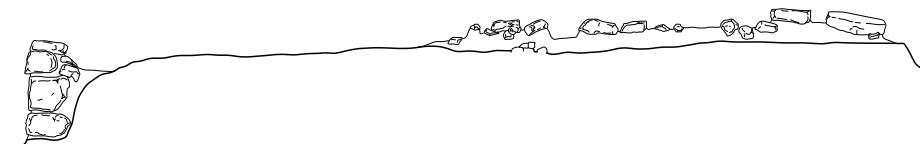
20-2石垣西壁
D, L=585.40m

D'



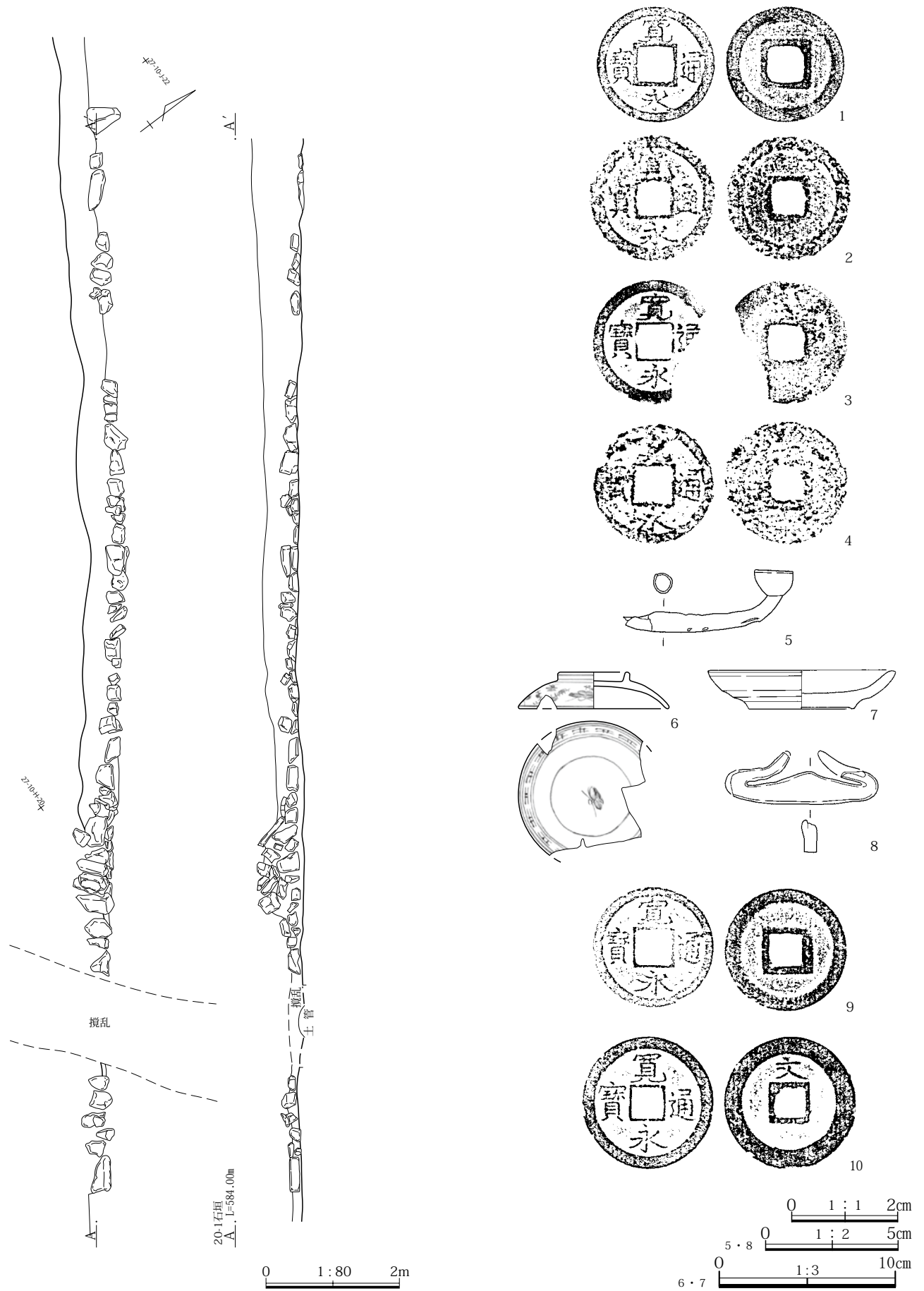
20-2a石垣北壁
E, L=585.40m

E'

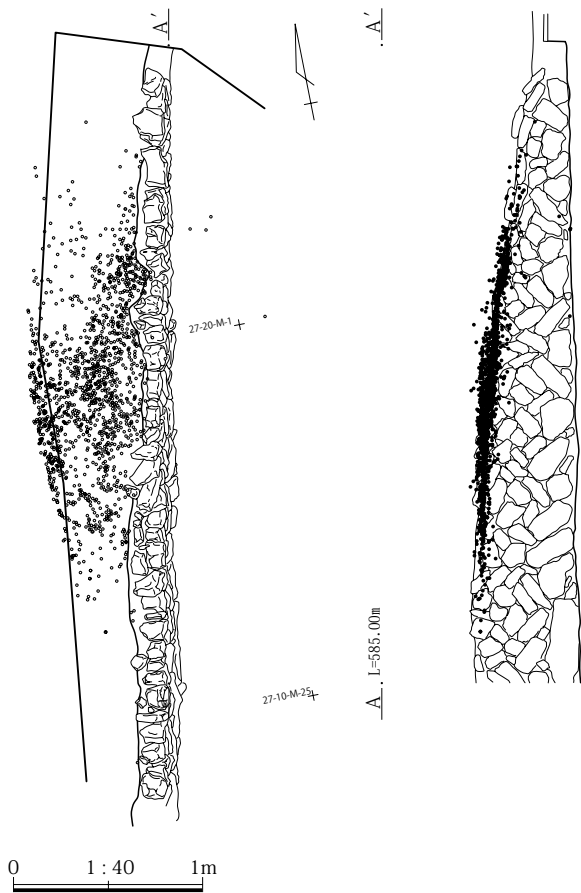


0 1:80 2m

第128図 観音堂区石垣(1)立面図



第129図 観音堂区石垣(2)・出土遺物



第130図 観音堂区1号石垣経石出土分布図

重複：周辺には、関連する遺構も近接しておらず、重複遺構は無い。単独の検出である。

遺物：経石多数の出土を見る。磁器破片を少量見るが、時期の特定には至らない。

所見：経石が集中することから、経塚としての性格が想起されよう。出土経石は5000点以上で、石垣上面部から北東側を中心に、限られた範囲に集中する。また、石垣の各礫間や最下層にも集中が見られた。このことから、本遺構は経塚ではなく、経石は後世の攪乱行為をうけた可能性もある。このことについては、後述する。

(4) 経石について (第133～165図/PL46～66)

観音堂区で出土した経石は20,000点あまりである。1号塚および1号石垣とその周辺からの出土である。本書では、観音堂区として報告している。1号塚及び1号石垣で経石を出土した平成17年度調査では、経塚としての可能性を踏まえて、全て原位置での記録を努めたが、出土点数が多量なこと、出土状態に攪乱を受けた痕跡が見出されたことから、平成18年度調査では、観音堂区内で出

土した経石は原位置記録を取らず、一括して取り上げた。攪乱を受けた痕跡として、経石の一部は調査区内にあるコンクリート基礎にも埋め込まれており、さらに、近～現代にかけて道普請など地業行為や石垣補強に経石が使用されていたようで、観音堂区内の各所に散乱した状態の出土が見られた。1号塚及び「観音堂」周辺は、遺跡を横断する現道直下及びその縁辺で検出された遺構であり、表土層の堆積も薄く、後世の攪乱や破壊は著しい地点である。

発掘調査では、これら攪乱地点からの出土した経石に対しても採集に努め、コンクリート基礎に埋め込まれた経石も丁寧にコンクリートを除去して出土遺物として取り上げた。このように、経石出土状態は決してプライマリーではなく、二次的な行為が加わった様相と判断された。また、長野原町内の経石出土遺構からは、60000点以上の出土が見られ、本遺跡の出土は総数20000点に留まっていることを鑑みると、経石の大半は、逸失した可能性が高いと窺われよう。

経石出土地点周辺は、墓地・石造物が集中する箇所でもあったが、いずれの石造物にも、願文や金石文など、経石埋納行為を示唆する資料は確認できなかった。また、経石の造作経緯や時期を表す、「多字一石経」や宝篋印塔などの造立痕跡は見られなかった。このように、経碑・願文といった、経石の性格を示唆する施設・資料は出土・確認しておらず、残念ながら、本遺跡の経石の性格など詳細は判然としない。

発掘調査においては「観音堂」周辺及び1号塚出土の経石をすべて採集する調査方針となり、可能な限り遺物として取り上げた次第である。

整理作業においては、20,000点あまりの経石に対して、経字の有無を確認し、経字の痕跡がある例を約8,000点に見る事ができた。全てを図示せず、経字の明瞭な例を優先して、図示が果たせた経石は1200点である。

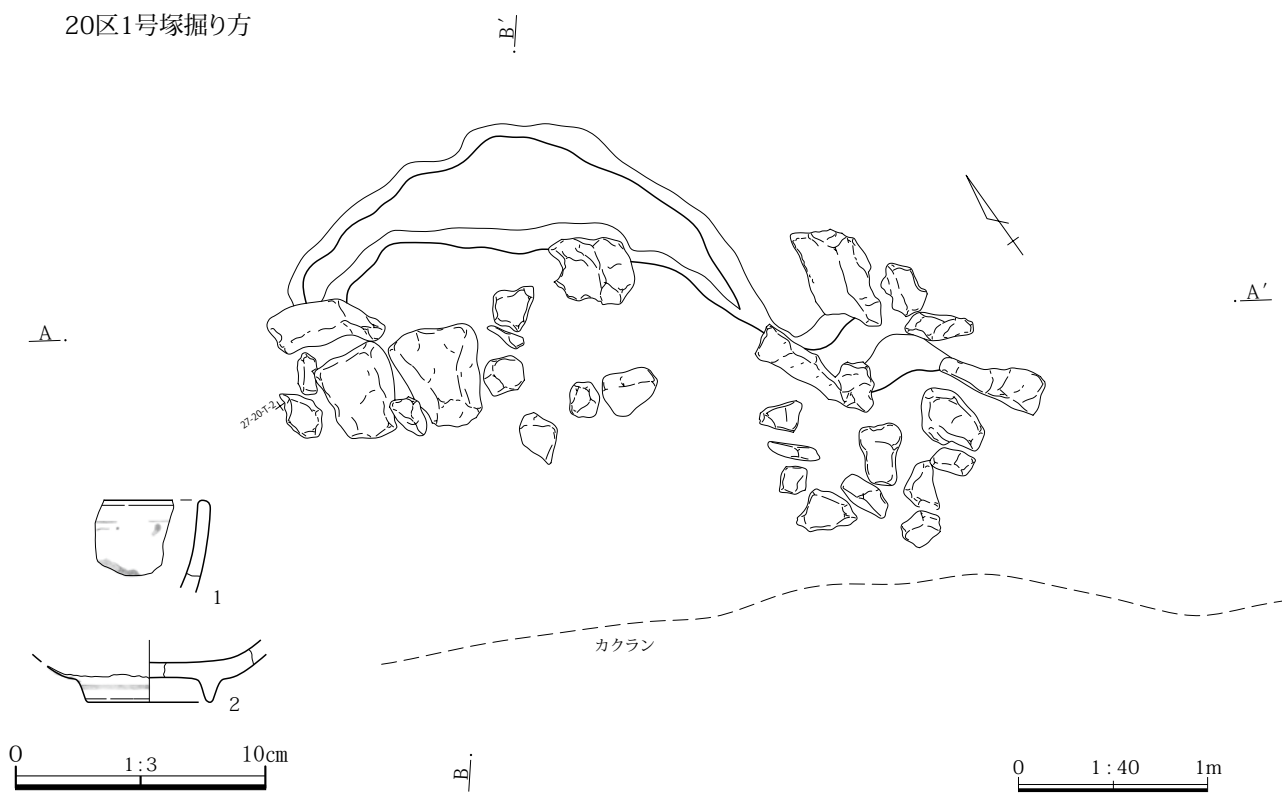
経石の識字の結果、約8000点の経石に経字が認められたが、8000点全ての経字が判断できたわけではない。残念ながら、多くの経字が偏や傍のみの判別であり、経字として判断できず、判読不能の経石もあった。偏・傍など文字の一部のみの判読の場合、経石の天地・左右など判断に苦慮する個体も多かった。

経石の実測図はすべて1/2で掲載し、経字の描かれた

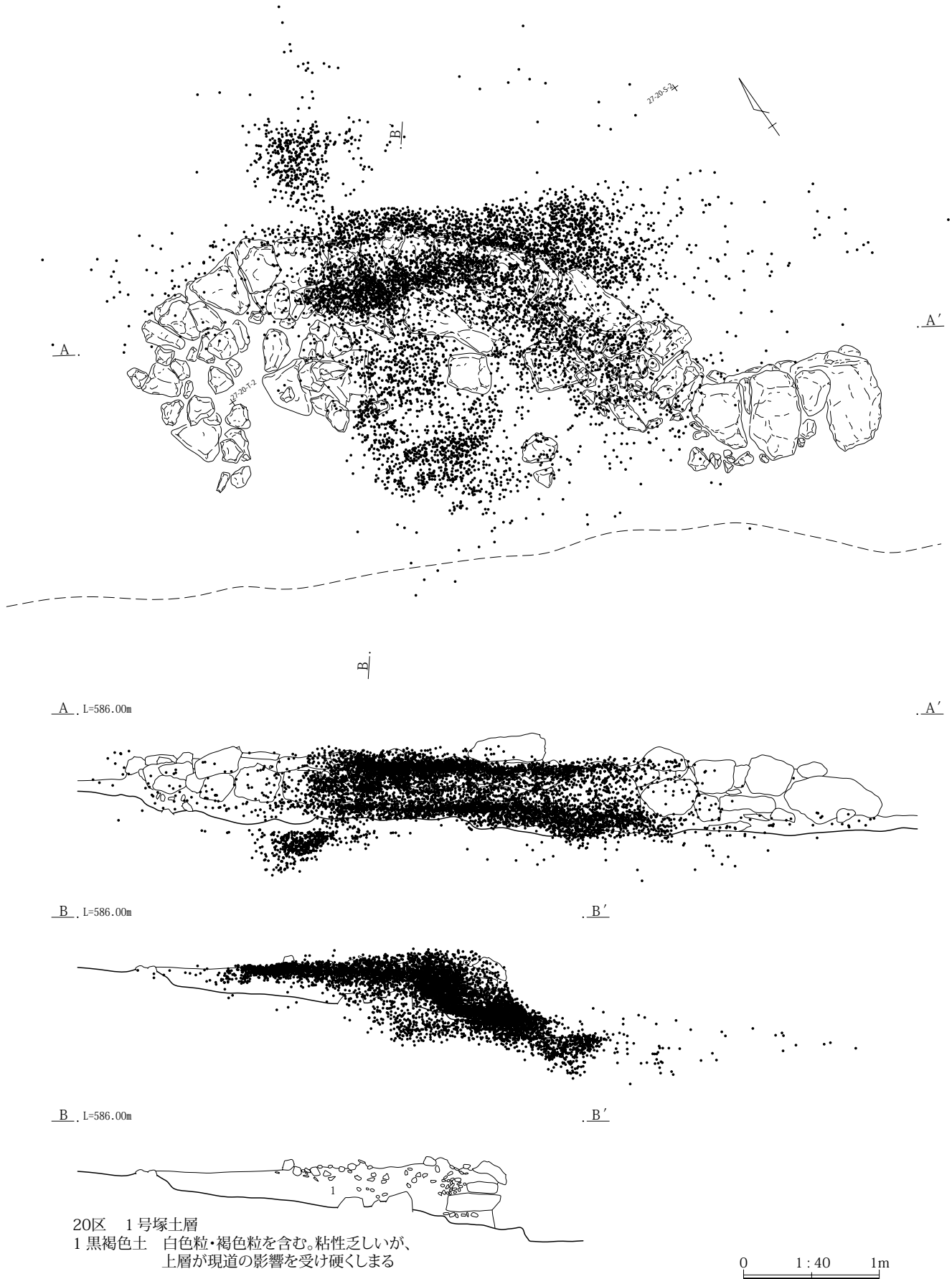
20区1号塚



20区1号塚掘り方



第131図 観音堂区1号塚・出土遺物



第132図 観音堂区1号塚経石分布図

面のみを平面図とし、断面図を加えた。断面は経字を中心として取った。経字が素材礫の凹凸に影響された例もあったため、礫の稜線も表現し、経字の書かれた面が平坦なのか、凹凸があったのかも実測図に盛り込んだ。平坦面を選ぶ傾向はあり、中には素材礫の形状に左右された運筆も看取された。

掲載は1号塚、10-20区1号石垣、「観音堂」とした出土地点に分け、画数順に挙げた。また掲載番号は巻末に付した一覧表の番号を掲載した。

経石の大きさは、比較的通常の例が3～5cm前後の円礫が主である。大型のものは、8cmを超え、小型の例は1.5cmを測るものもある。経字を書く箇所は、礫の長軸に沿う例が多数だが、短軸を重視した経石も見られた。書く面は礫素材の中で平坦面を選ぶ傾向にある。石材は、安山岩を主としており、デイサイト、石英閃緑岩、チャートも見られた。数例だが小型の磨滅した軽石もあった。すべて地元の礫であり、吾妻川河川敷で採集できる石材である。余談だが、横壁中村遺跡は縄文時代の遺跡でもあるため、磨りなどの石器を経石とする例を期待したが、1点も見られなかった。採集地は「観音堂」周辺ではなく、川原に降りて小型礫を選別・採集したのであろう。

経字を識別できた経石の多くが、河川敷で採集されたためか、あるいは経年の雨水による影響か、錆化-酸化鉄の影響を受けていたが、水に浸けこんで識別した整理方法が幸いし、錆化した経石も識字できた。なお、識字作業に際しては異体字や偏・旁の誤読も生じていると思われる。ご容赦願いたい。

文字は、すべて黒色の墨書で書かれていた。崩し字は無く楷書体で書かれており、運筆もたどたどしくなく、正確な文字が殆どで、経字を正確に把握した人物（おそらく僧侶）が想起された。後述するが、経字の筆跡は、数人の書き手が想定され、さらに素材礫全面に書いた例や中心部のみに小さく書かれた例もあり、多様なあり方を示していた。

また、1号塚と「観音堂」や1号石垣にも共通の筆跡が認められることから、経石の移動も可能性がある。同時に経石の書き手が両地点に係わった可能性も考えにいなければならない。前者の場合、経石の多くは後世の攪乱を受け、観音堂区内を移動した可能性である。後者の場合は、経石は原位置を止め出土したことになる。整

理作業では、経石の出土状態から、経石は攪乱を受けていたと判断したものの、原位置は観音堂区内に収まる可能性が極めて高いと位置付けた。

経石の出典は多くは「法華経」とされている。横壁中村遺跡で出土した経石経字も「法華経」を示唆する経字が大半である。しかしながら、前述のように経石が後世の攪乱によって移動した可能性があること、複数の書き手が存在することを併せると、また、「法華経」に見られない経字も複数見られたことから、すべてを「法華経」とは確定できなかった。このことについては、後述したい。

次に、経石の時期の特定だが、これも残念ながら詳細な年代は充てられない。

観音堂区の各遺構の時期は縄文・弥生・平安時代を除くと、中世・近世・近代に集まる。中世遺構は墓墳を主とし、宋銭等を出土している。経石の出土は見られない。近世遺構はおそらく9・10号掘立柱建物跡であり、これは「観音堂」である。後述するが、「観音堂」建立は貞享元年（1684）とされており、大正11年に小倉地区の「勢至堂」に合併し移動されている。また、観音堂を取り巻く石垣であるが、2b石垣の一部が近世後半～近代の墓墳の上に乗る様相から、近世～近代にかけて、増改築されたと推定できよう。このことから横壁中村遺跡の経石は、観音堂設立後と考えられ、おそらく近世前期～後期段階にかけて複数回にわたって行われたものと考えておきたい。



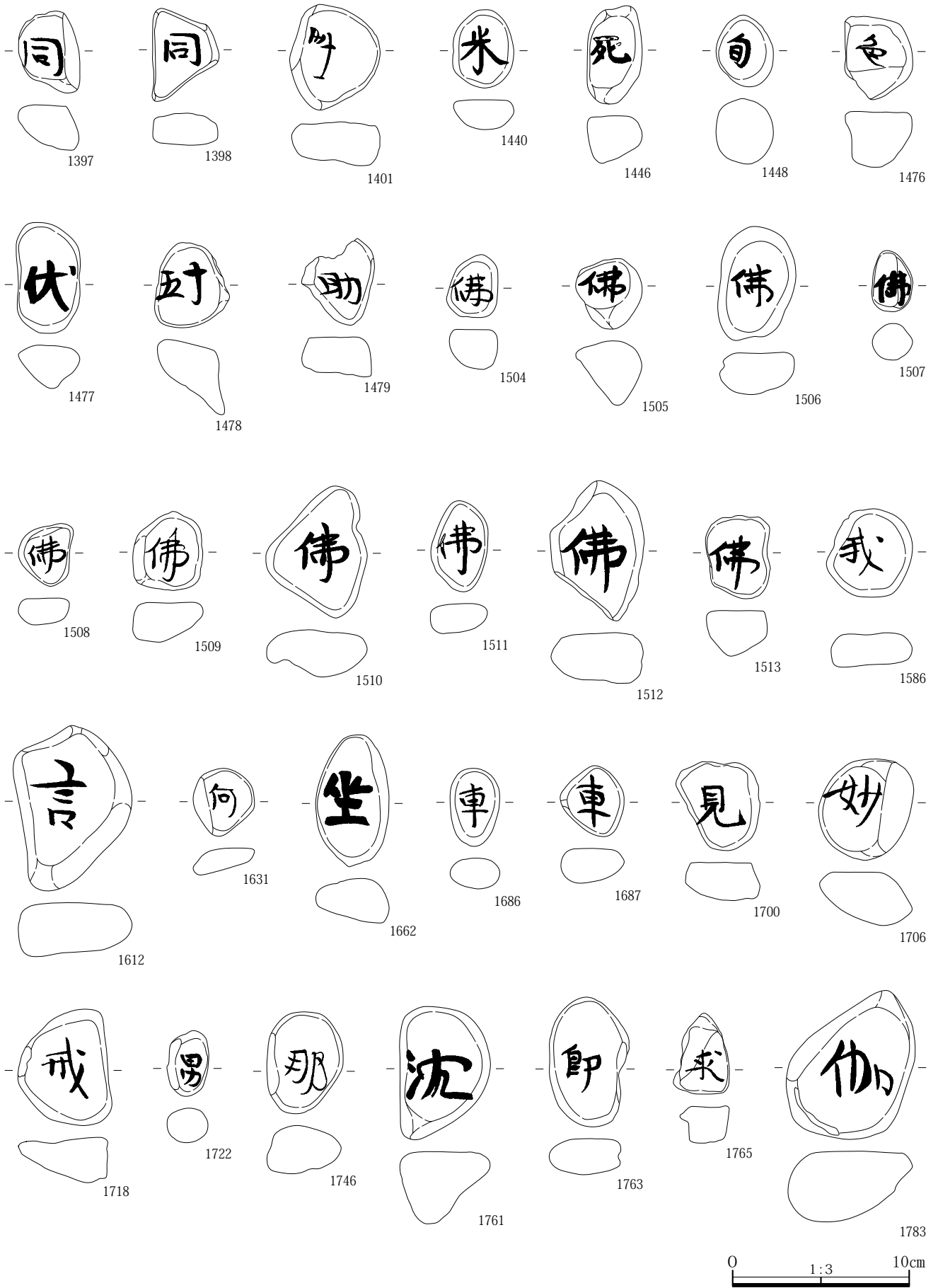
第133図 観音堂区（1号塚）出土経石（1）



第134図 観音堂区（1号塚）出土経石（2）



第135図 観音堂区（1号塚）出土経石（3）



第136図 観音堂区（1号塚）出土經石（4）



第137図 観音堂区（1号塚）出土經石（5）



第138図 観音堂区（1号塚）出土經石（6）



第139図 観音堂区（1号塚）出土経石（7）



第140図 観音堂区（1号塚）出土經石（8）



第141図 観音堂区（1号塚）出土經石（9）

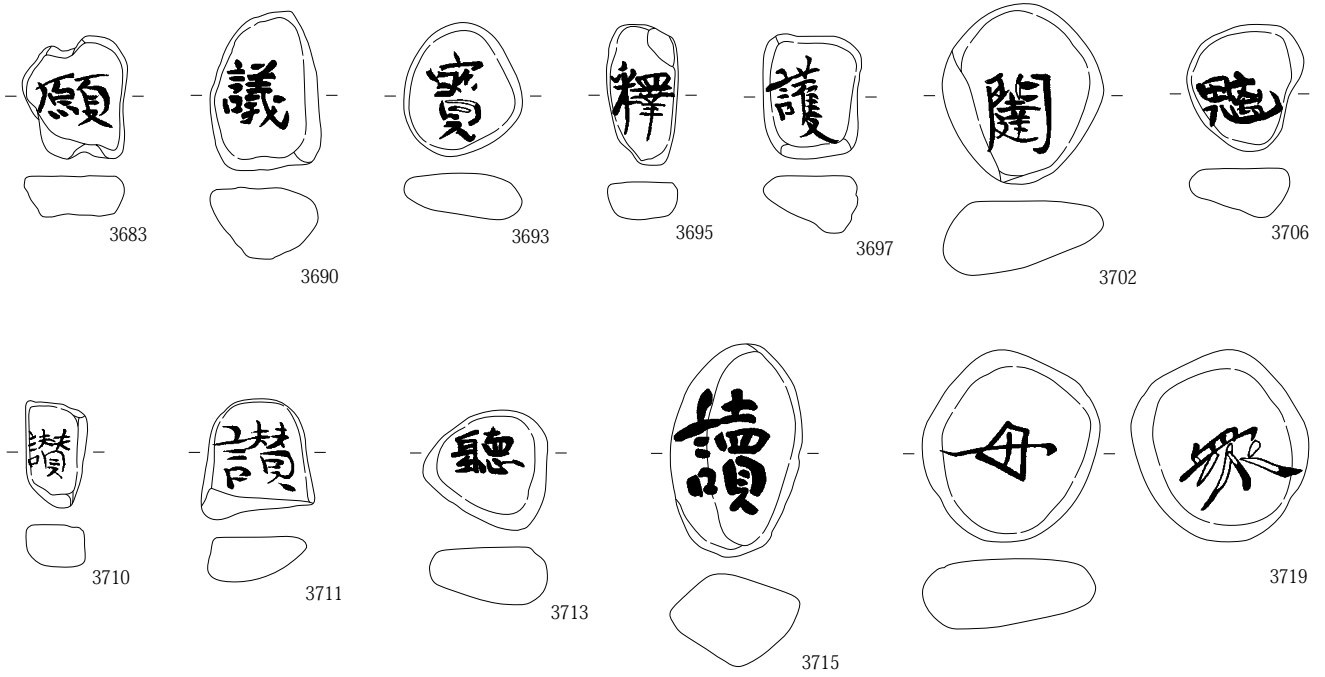


第142図 観音堂区（1号塚）出土經石（10）

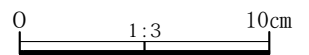
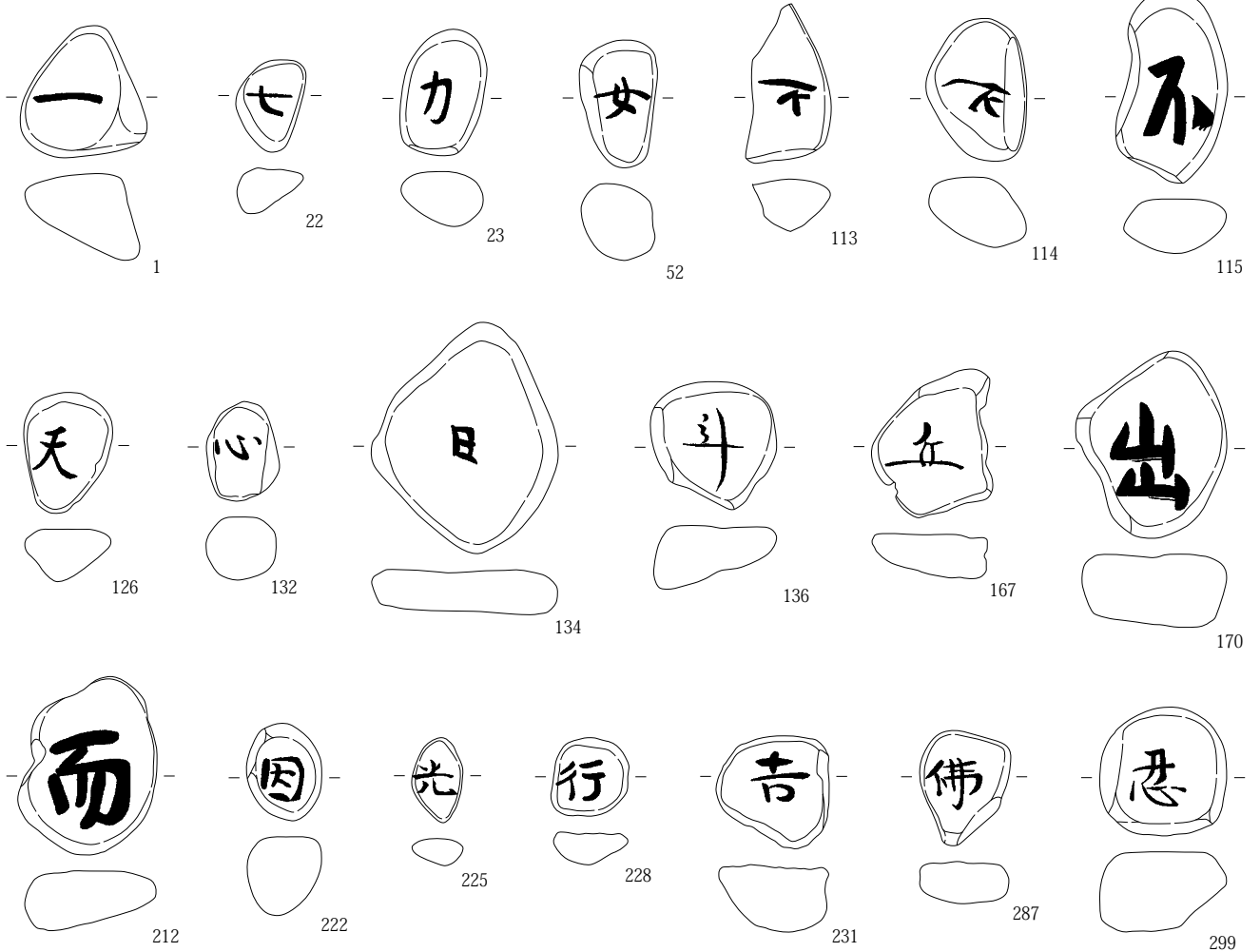


第143図 観音堂区（1号塚）出土經石（11）

1号塚



20区1号石垣

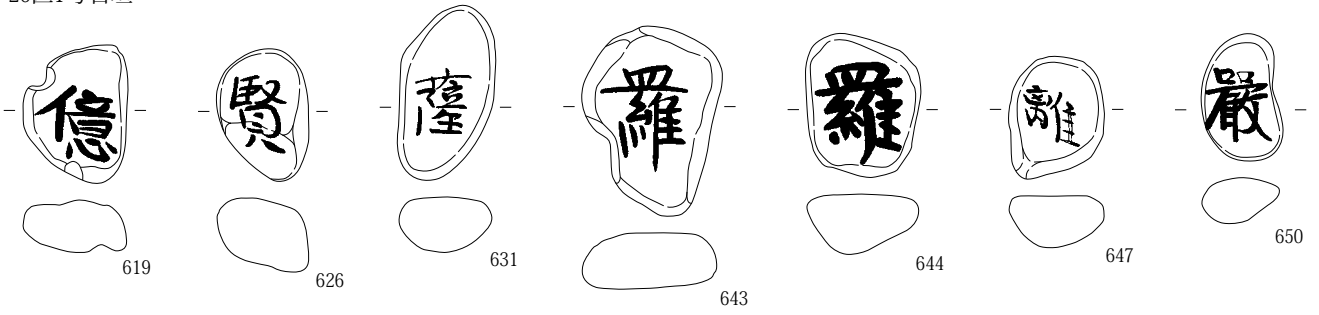


第144図 観音堂区（1号塚・20区1号石垣）出土経石（12）



第145図 観音堂区（20区1号石垣）出土經石（13）

20区1号石垣

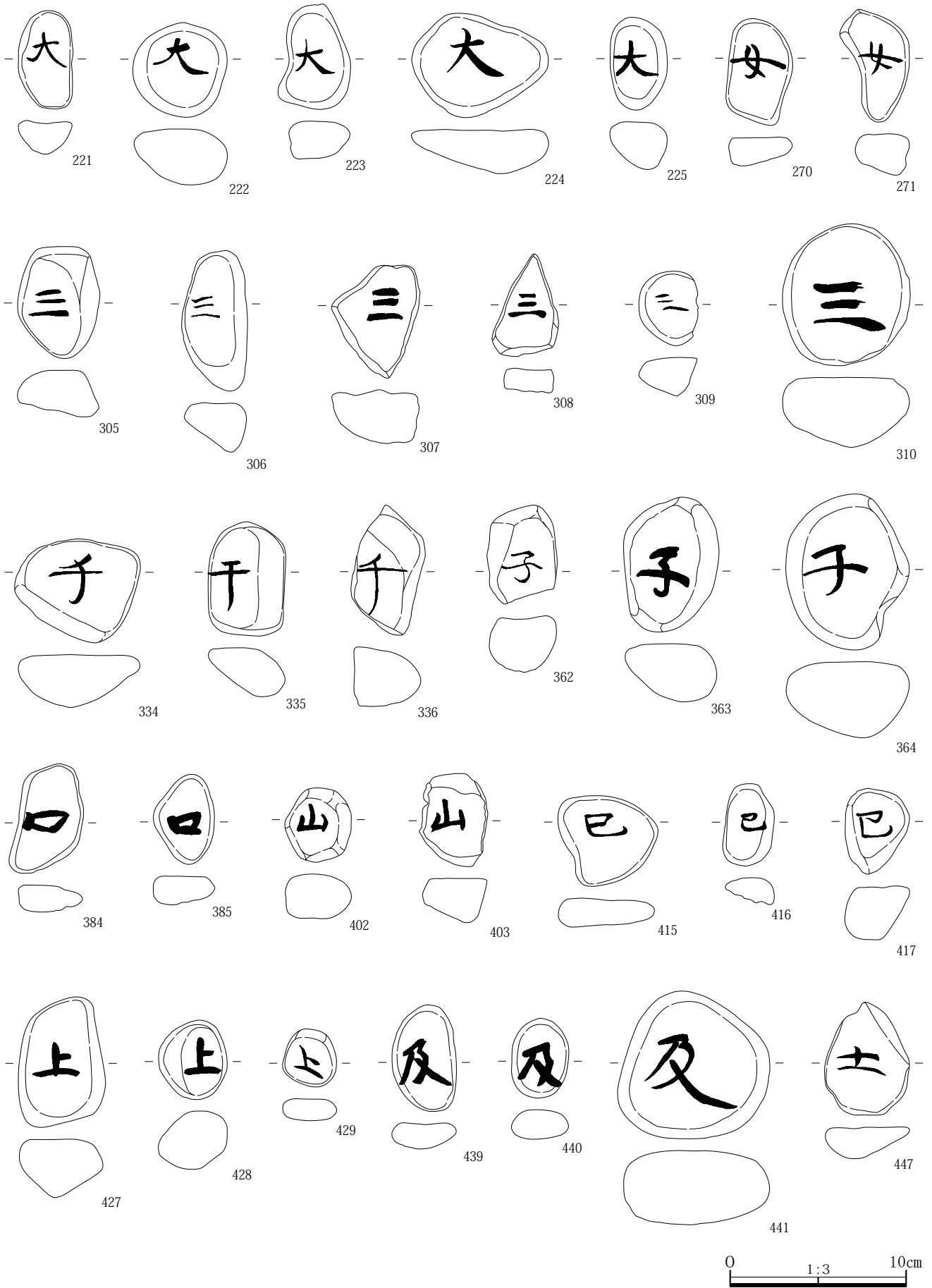


20区2号石垣

観音堂表採



第146図 観音堂区 (20区1号石垣・2号石垣・観音堂) 出土経石 (14)



第147図 観音堂区（観音堂）出土經石（15）



第148図 観音堂区（観音堂）出土經石（16）



第149図 観音堂区（観音堂）出土経石（17）



第150図 観音堂区（観音堂）出土經石（18）



第151図 観音堂区（観音堂）出土経石（19）



第152図 観音堂区（観音堂）出土經石（20）



第153図 観音堂区（観音堂）出土經石（21）



第154図 観音堂区（観音堂）出土經石（22）



第155図 観音堂区（観音堂）出土經石（23）



第156図 観音堂区（観音堂）出土經石（24）



第157図 観音堂区（観音堂）出土經石（25）



第158図 観音堂区（観音堂）出土經石（26）